

史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇〇七―一六

史跡
慈照寺（銀閣寺）
旧境内

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、研修道場および休憩所新築工事にともなう史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

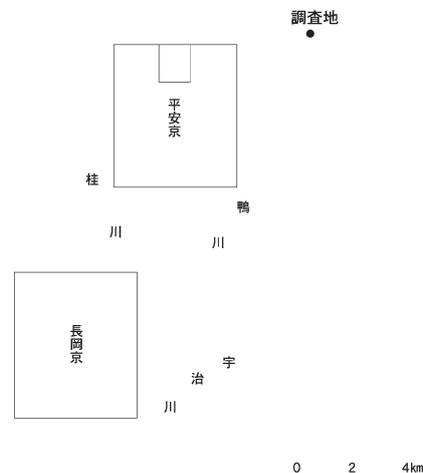
平成 20 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内 |
| 2 調査所在地 | 京都市左京区銀閣寺町 |
| 3 委 託 者 | 宗教法人 慈照寺 代表役員 有馬頼底 |
| 4 調査期間 | 2007年11月9日～2008年1月29日 |
| 5 調査面積 | 227 m ² |
| 6 調査担当者 | 内田好昭 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1:2,500）「田中」「吉田」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 通し番号を付し、写真の番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 16 本書作成 | 内田好昭 |
| 17 編集・調整 | 児玉光世・山口 眞 |



(調査地点図)

目 次

| | |
|----------------------|----|
| 1. 調査経過 | 1 |
| 2. 位置と環境 | 3 |
| (1) 位置と環境 | 3 |
| (2) 既往の調査 | 4 |
| 3. 遺 構 | 5 |
| (1) 1区の遺構 | 5 |
| 1) 基本層序と遺構検出面 | 5 |
| 2) 第4層上面の遺構 | 11 |
| 3) 第5層上面の遺構 | 12 |
| 4) 第8層上面の遺構 | 12 |
| (2) 2区の遺構 | 15 |
| 1) 基本層序と遺構検出面 | 15 |
| 2) 第6層上面の遺構 | 15 |
| 3) 第8層上面の遺構 | 17 |
| (3) 3区の遺構 | 27 |
| 1) 基本層序と遺構検出面 | 27 |
| 2) 第6層上面の遺構 | 27 |
| 3) 第8層上面の遺構 | 28 |
| 4. 遺 物 | 33 |
| (1) 遺物の概要 | 33 |
| (2) 土器類 | 34 |
| (3) 瓦類 | 38 |
| (4) その他の遺物 | 39 |
| 5. ま と め | 40 |
| (1) 遺跡の変遷 | 40 |
| 1) 東山殿以前（平安時代） | 40 |
| 2) 東山殿・慈照寺期1（室町時代後期） | 40 |
| 3) 慈照寺期2（江戸時代前半期） | 44 |
| 4) 慈照寺期3（江戸時代後半期以降） | 44 |
| (2) 石垣7・溝8の石工技術 | 45 |

図 版 目 次

| | | | |
|------|----|-----------------|--------------------|
| 図版 1 | 遺構 | 1 | 1区第4層上面全景（東から） |
| | | 2 | 1区第5層上面全景（南東から） |
| 図版 2 | 遺構 | 1 | 1区東壁わき断割状況（北東から） |
| | | 2 | 2区第6層上面全景（北西から） |
| 図版 3 | 遺構 | 2区第8層上面全景（北西から） | |
| 図版 4 | 遺構 | 1 | 2区石垣7・溝8（西から） |
| | | 2 | 2区石垣7・溝8（北から） |
| 図版 5 | 遺構 | 1 | 3区第6層上面全景（北東から） |
| | | 2 | 3区北端部第8層上面全景（南東から） |
| 図版 6 | 遺構 | 3区南拡張区堤30（北西から） | |
| 図版 7 | 遺物 | 1 | 溝6・11・12・25出土土器類 |
| | | 2 | 第6層出土土器類 |
| 図版 8 | 遺物 | 1 | 第7A層出土土器類 |
| | | 2 | 溝8出土土器類 |
| | | 3 | 溝29・31出土土器類、土器1 |
| | | 4 | 平安時代土器類 |
| 図版 9 | 遺物 | 瓦類、飾金具、加工石材 | |

挿 図 目 次

| | | |
|------|-----------------------|----|
| 図 1 | 調査前全景（東から） | 1 |
| 図 2 | 2区作業風景（西から） | 1 |
| 図 3 | 調査区配置図（1：400） | 2 |
| 図 4 | 調査位置図（1：2,500） | 3 |
| 図 5 | 1区西壁断面図（1：40） | 7 |
| 図 6 | 1区第4層上面遺構平面図（1：100） | 8 |
| 図 7 | 1区第5層上面遺構平面図（1：100） | 9 |
| 図 8 | 1区第8層上面遺構平面図（1：100） | 10 |
| 図 9 | 1区北東拡張区東壁わき断割状況（北西から） | 13 |
| 図 10 | 溝29・堤30実測図（1：40） | 14 |
| 図 11 | 2区地層断面図（1：40） | 15 |

| | | |
|------|------------------------------|----|
| 図 12 | 2区第6層上面遺構平面図（1：100） | 16 |
| 図 13 | 溝5平面図（1：50） | 17 |
| 図 14 | 2区第8層上面遺構平面図（1：100） | 18 |
| 図 15 | 石垣7・溝8実測図1（1：50） | 19 |
| 図 16 | 石垣7・溝8実測図2（1：50） | 20 |
| 図 17 | 溝8断面図（1：40） | 21 |
| 図 18 | 溝8角石拓影・断面図（1：10） | 21 |
| 図 19 | 石垣7・溝8角石の加工痕拓影（1：6） | 22 |
| 図 20 | 石垣7角石西辺の加工痕（左）と溝8角石西辺の加工痕（右） | 22 |
| 図 21 | 矢穴痕拓影（1：8） | 23 |
| 図 22 | 割石1～4 | 24 |
| 図 23 | 矢穴拓影・実測図（1：4） | 25 |
| 図 24 | 3区東壁・南壁断面図（1：40） | 27 |
| 図 25 | 3区第6層上面遺構平面図（1：100） | 28 |
| 図 26 | 第8層上面検出遺構平面図（1：100） | 29 |
| 図 27 | 溝31・小堤36実測図（1：40） | 30 |
| 図 28 | 溝31・小堤36検出状況（南東から） | 31 |
| 図 29 | 堤30・溝33・小堤37実測図（1：40） | 31 |
| 図 30 | 小堤35検出状況（北東から） | 32 |
| 図 31 | 溝6・11・12・25出土土器類実測図（1：4） | 34 |
| 図 32 | 第6層出土土器類実測図（1：4） | 35 |
| 図 33 | 第7A層出土土器類実測図（1：4） | 35 |
| 図 34 | 溝8出土土器類実測図（1：4） | 36 |
| 図 35 | 溝29・31出土土器類および土器1実測図（1：4） | 37 |
| 図 36 | 平安時代土器類実測図（1：4） | 37 |
| 図 37 | 瓦類拓影・実測図（1：4） | 38 |
| 図 38 | 飾金具実測図（1：2） | 39 |
| 図 39 | 遺構変遷図（1：400） | 41 |

表 目 次

| | | |
|-----|-------|----|
| 表 1 | 遺構概要表 | 5 |
| 表 2 | 遺物概要表 | 33 |

史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内

1. 調査経過

この調査は、慈照寺研修道場および休憩所の新築工事に先立って実施したものである。両建設計画地は史跡慈照寺（銀閣寺）旧境内にあたるため、工事によって地中の遺跡が破壊される恐れがあった。そのため、計画地の遺跡の時期、性格、広がり、深さなどを確認するために発掘調査を行った。3箇所の調査区を設け、1～3区とした。1区（102㎡）と3区（55㎡）は研修道場計画地に、2区（70㎡）は休憩所計画地に設定した。調査地の調査前の状況は、駐車場、車庫、休憩所などであった。

既存建物の解体工事の進捗状況にあわせて、1区、2区、3区の順に調査した。1区は2007年11月12日に、2区は11月19日に、3区は12月10日に調査を開始した。調査は随時、京都府・京都市文化財保護課の指導を受けつつ進め、江戸時代後期以降の遺構は記録保存し、平面的な調査は保存協議の対象となる江戸時代前期面にとどめることを基本とした。江戸時代以前の遺構面については断割調査で確認することにしたが、必要に応じて部分的に室町時代面の平面調査を行った。1区では、南半部で江戸時代の溝数条を検出し、北端部では断割調査で東西方向に延びる室町時代の堤状遺構を検出した。堤状遺構の東への延長状況を確認するため、調査区東端から北にむかって拡張し（北東拡張区）、ここでも堤状遺構を確認した。2区では、旧耕作土下で江戸時代前期頃の石組の暗渠溝を検出したが、現代攪乱坑の壁面に、それ以前の石垣遺構が露出していたため、暗渠溝を破壊しない範囲で下層を掘り下げ、平面的な調査を行った。その結果、室町時代の石垣とそれに取り付く石組溝を検出した。3区では江戸時代面を調査した後、断割調査で下層の状況を確認した。同時に、1区で検出した堤状遺構の西への延長状況を確認するため、南側に拡張した（南拡張区）。断割調査の結果、3区の北端で礫の集積遺構を検出し、その性格を明らかにするため、部分的に下層の平面的な調査を行った。あわせて、北側を拡張した（北拡張区）。南拡張区では堤状遺構を確認したが、堤状遺構は北側に曲がる可能性があったので、さらに西拡



図1 調査前全景（東から）



図2 2区作業風景（西から）

張区を設けて状況の把握に努めた。

以上のように、各調査区で室町時代の遺構を検出し、東山殿・慈照寺の当時の景観が明らかになった。これを受けて、2008年1月18日に慈照寺主催の広報発表を行い、同月21日に現地説明会を開催した。異例の平日での現地説明会となったが、参加者は約450人にのぼった。検出した遺構および遺構面は保存協議の対象となるため、真砂と土嚢で養生したうえで残土を埋め戻した。1月29日にすべての現地作業を終了した。

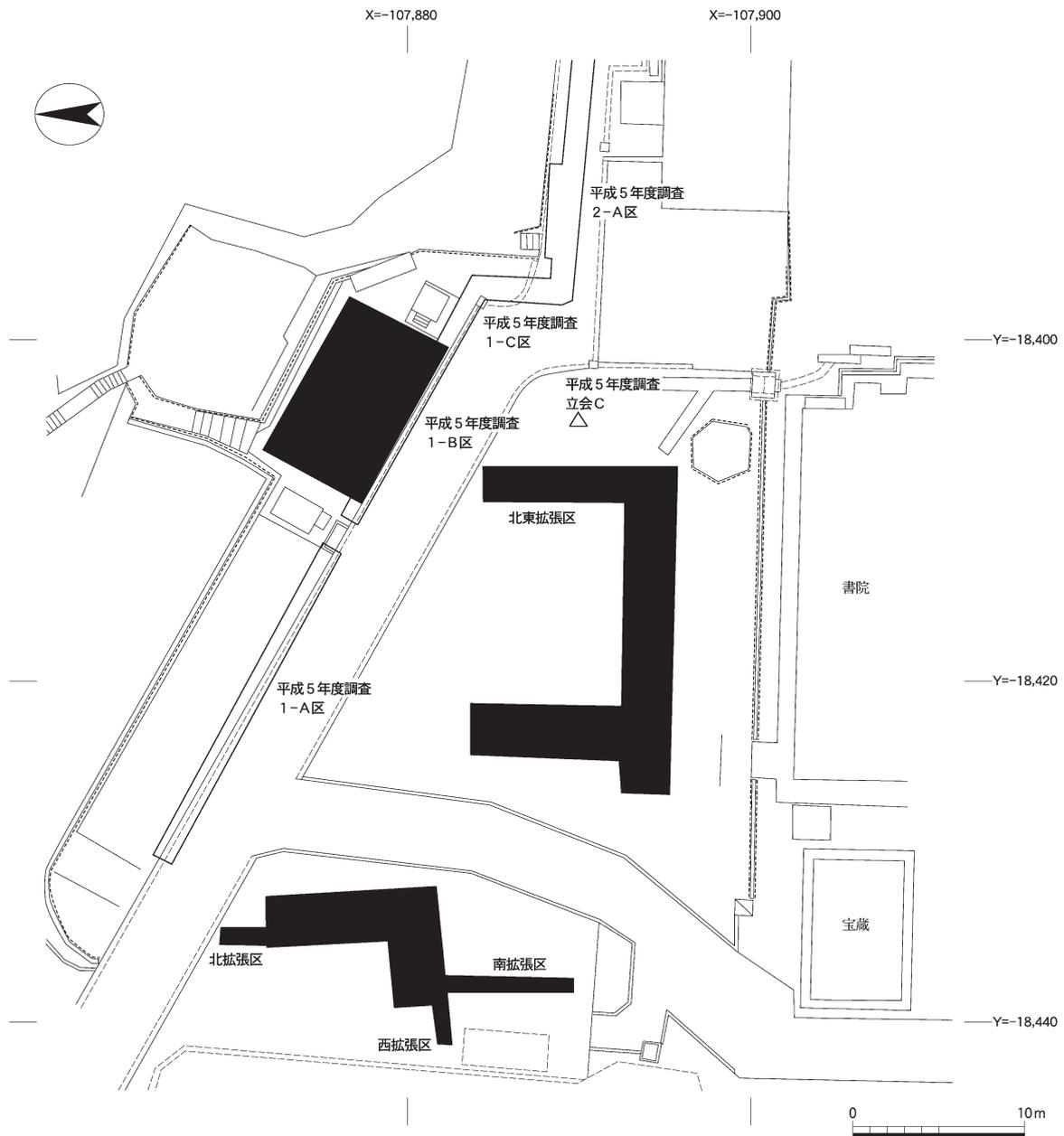


図3 調査区配置図（1：400）

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は、慈照寺の主要建物や庭園が占める区域の北側裏手にあたり、さらに北側は現存石垣擁壁を介して緩やかな傾斜の台地となる。この緩斜面は、中尾山と大文字山との谷を流れ出た大文字川が形成する扇状地で、ここを人為的に開削して慈照寺が占地する平坦面が成り立っている。したがって、調査地の北側は、一見、急傾斜の山裾がそそり立つように感じられるが、これは人為的地形改変の結果であって、自然地形による景観ではない。調査地付近の標高は約93mで、目立った傾斜はなく平坦である。南は慈照寺主要伽藍域にむかって緩やかに下り、西は隣地の浄土寺や民家との間に切盛りによる急激な段がある。

室町幕府第8代将軍の職を辞した足利義政（1436～1490）は、文明15年（1483）、10世紀頃から存在した天台宗の寺院である浄土寺の旧址であったこの地に山荘「東山殿」を造営した。義政は延徳2年（1490）にここで病没し、東山殿は遺命により禅院に改められ慈照寺となった。慈照寺は、室町幕府の衰退や戦災などにより16世紀には荒廃が進むが、慶長19年（1614）に

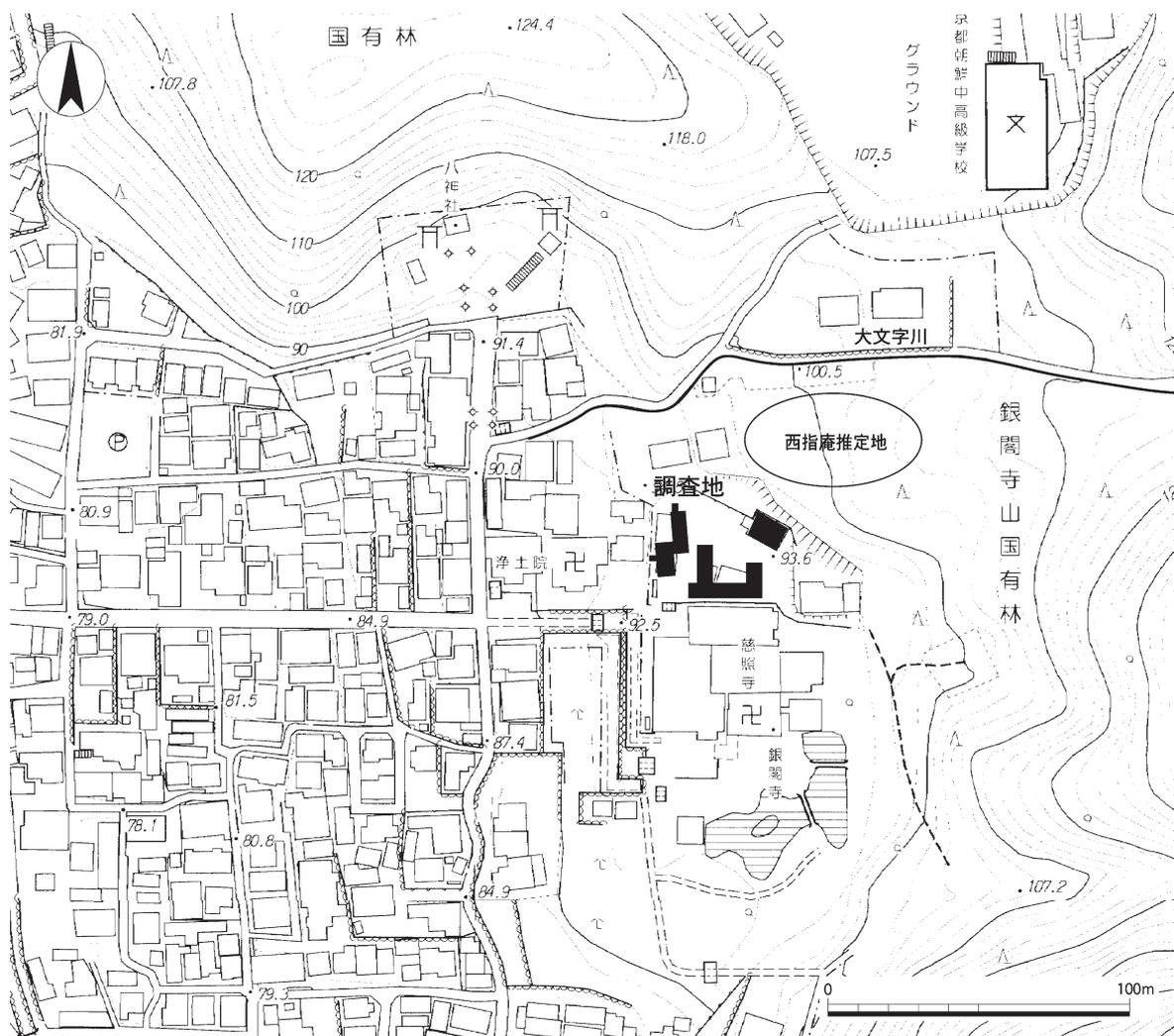


図4 調査位置図（1：2,500）

典膳局宮城豊盛などの援助により、建物の新造や既存建物の修理、庭園の修築などがなされた。現在の境内の景観はこの頃に整えられたものと考えられている。

東山殿の景観については、いくつかの復元案が示されているが、よくわかっていない。現在の境内には東山殿時代の遺構である銀閣（観音殿）と東求堂が残されているが、江戸時代の復興期に場所が移されている可能性も指摘されている。今回の調査区付近については、特に主要建物を充てずに空閑地や森林とする復元案¹⁾と対屋や台所を充てる復元案²⁾がある。また、発掘調査の成果に基づいて調査地付近を園池とする復元案があるが、これについては後述する。

調査区付近の江戸時代後期の景観については、寛政2年（1790）の「銀閣寺境内図」が参考になる³⁾。これによれば、調査地付近は「藪」とされる範囲に含まれ、建物や施設は存在しなかった。なお、「銀閣寺境内図」は、調査地の北側に当たる地点を「西指庵跡」と記している。西指庵は東山殿の主要建物のひとつである。東求堂とならぶ持仏堂的建物と考えられるが、眺望のよい高所にあり、実際は遊興の場として利用されることが多かった⁴⁾。「銀閣寺境内図」の記載は、江戸時代後期に調査地北側の台地上が西指庵の旧地と認識されていたことを示すものであり、「銀閣寺境内図」の記載に従って西指庵を配置する復元案もある⁵⁾。

近代以降の調査区付近は、明治28年（1895）の「洛東銀閣寺之真景」⁶⁾や古写真を参照すると畑であった。畑の景観は、1960年代まで続いたという証言もある。

（2）既往の調査

既往の調査については、『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003- 1』に要領よくまとめられているので、繰り返さない⁷⁾。ここでは、今回の調査区に近接する平成5年（1993）度の調査成果についてのみ触れておく⁸⁾。この調査では、江戸時代の流路護岸とされる石組みが2区の南側の1-B区で検出されており、残存状態が良好であれば2区で検出されることは明らかであった。室町時代の遺構としては、同じく1-B区で池の東側護岸とされる石組みが、3区北東部の1-A区では池の西側護岸とされる石組みが検出されている。1区東側の立会C地点では、この池の南岸とされる落ち込みが断面で確認されている。また、こうした成果に基づいて、調査地付近を東山殿・慈照寺の主要建物群の北側に広がる園池とする復元案が示されている⁹⁾。以上により、調査に先立って、3区の東側から2区の西側にかけては池が広がり、1区では池の南岸もしくは中央部が検出されることを予測した。

3. 遺 構

調査区ごとに遺構を説明する。基本層序については、1区での層序の記載をもって全体の基本層序とし、2区と3区については簡単に触れることにする。

(1) 1区の遺構

1) 基本層序と遺構検出面 (図5)

現代盛土下に9層の基本層序を認めた。上位の地層から下位に向かって第1～9層とした。細分可能な地層については、上位の地層からA、B、C…とアルファベットを付した。以下、概説する。

第1層 黒褐色(2.5Y3/2)シルト層で、層厚は10～30cmある。近代以降の陶磁器類が出土する。出土遺物と上下層との関係により19世紀末から20世紀とわかる耕作土で、各調査区の全域に分布する。なお、1区南壁では、本層と第2層の間に流水性の黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂層が第1層に削られながらも部分的に残存する。アルコーズ質¹⁰⁾の砂である。

第2層 暗灰黄色シルト層で、層厚は約10cmある。1区の南半に分布する。18世紀以降の陶磁器類が出土するが、上下層との関係により19世紀後半頃の整地層もしくは耕作土である。

第3層 第3A層と第3B層に細分できるが、一連の水成層である。1区の南半に分布する。第3A層は黄灰色(2.5Y4/1)シルト層で、層厚は約2cmある。止水性の堆積である。第3B層は灰黄色(2.5Y7/2)細～中粒砂で、層厚は約2cmある。流水性の堆積で、層中にシルト質の葉理が観察できる。出土遺物はないが、上下層との関係により18世紀後半から19世紀前半と判断できる。

第4層 第4A層と第4B層に細分できるが、一連の地層である。1区の南半と3区南拡張区に分布する。第4A層は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルトで、層厚は10～20cmある。第4B層は明黄褐色(10YR7/6)中～粗粒砂にオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルトブロックを含む地層で、

表1 遺構概要表

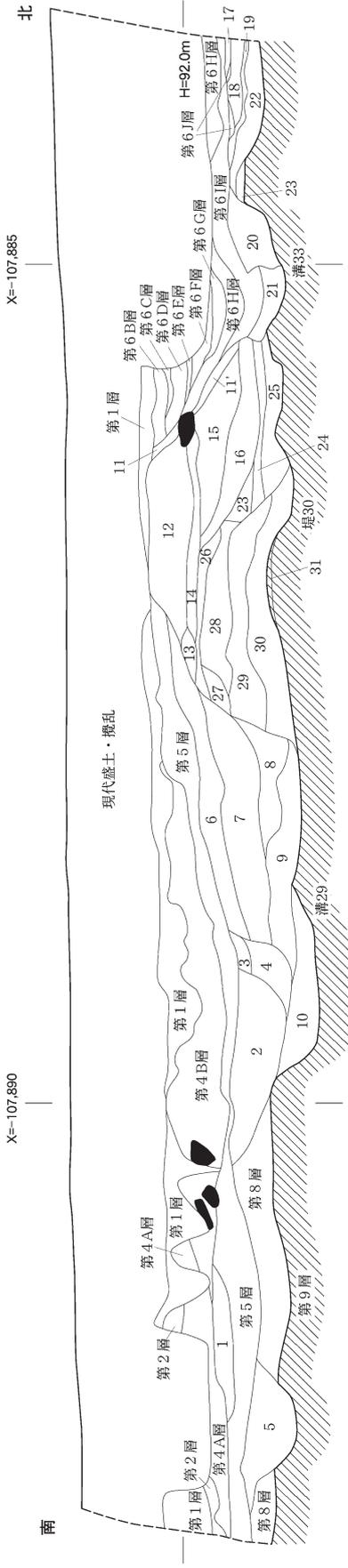
| 時 代 | 調査区 | 検出面 | 遺 構 | 備 考 |
|-----------|-----|-------|--------------------------|--------|
| 室町時代後期 | 1区 | 第8層上面 | 溝29・33、堤30 | |
| | 2区 | 第8層上面 | 石垣7、溝8、石組41、落ち42 | |
| | 3区 | 第8層上面 | 溝31・33・34、堤30、小堤35・36・37 | |
| 江戸時代前半期 | 1区 | 第5層上面 | 溝11・12 | 断割りで確認 |
| | 2区 | 第6層上面 | 溝5、土坑37～40・44 | |
| | 3区 | 第6層上面 | 土坑14、溝25 | |
| 江戸時代後半期以降 | 1区 | 第4層上面 | 溝2・6 | |
| | 2区 | 第6層上面 | 柱穴43 | |
| | 3区 | 第6層上面 | 柱穴15～23 | |

層厚は 10～40 cmある。両層からは 18 世紀以降の土器・陶磁器類および椀瓦などが出土する。出土遺物と上下層の関係から 18 世紀中頃から後半の地層と判断できる。南側に下がる斜面を平坦化する整地層である。

第 5 層 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルトで、上部に褐鉄の沈殿が顕著である。層厚は 10～20 cmある。1 区と 3 区南拡張区に分布する。出土遺物と上下層との関係から 17 世紀から 18 世紀前半の地層であるとわかる。整地層である。

第 6 層 水成のシルト～極粗砂である。砂層はいずれもアルコーズ質で一連の地層に見えるが、土壌化部分や堆積状況の観察から、第 6A～6L 層の 12 層に細分できる。第 6A 層は灰黄色 (2.5Y 5/2) 細～中粒砂の流水性堆積である。層厚約 5 cmある。2 区のみにある。第 6B 層は浅黄色 (2.5Y7/3) 微～細粒砂の流水性堆積で、上方に向かって粗粒化する。層厚は約 10 cmある。1 区北端部と 2 区にある。第 6C 層はにぶい黄色 (2.5Y6/3) シルトで、下位の第 6D 層の上部が土壌化したものである。層厚は約 2 cmある。1 区北端部にのみある。第 6D 層は浅黄色 (2.5Y7/3) 微～細粒砂の流水性の堆積で、上方に向かって細粒化する。層厚は約 10 cmある。1 区北端部にのみある。第 6E 層はにぶい黄褐色 (2.5Y6/4) シルトで、下位の第 6F 層の上部が土壌化したものである。層厚は約 2 cmある。1 区北端部にのみある。第 6F 層はにぶい黄橙色 (10YR7/4) 中粒砂の流水性堆積で、上方に向かって細粒化する。層厚は約 10 cmある。1 区の北端部にのみある。第 6G 層はにぶい黄色 (2.5Y6/4) シルト～微粒砂で上方に向かって細粒化する。上部に褐鉄の沈殿がある。層厚は約 6 cmある。1 区の北端部にのみある。第 6H 層は明黄褐色 (10YR6/6) 粗～極粗粒砂で径 10 cm以下の礫を含む流水性堆積である。上方に向かって粗粒化する。層厚は 10～40 cmある。1 区の北端部と 2 区および 3 区に広く分布する。第 6I 層はにぶい黄色 (2.5Y6/3) 極微～中粒砂の流水性堆積で、上方に向かって粗粒化する。層厚は 10～20 cmある。1 区北端部と 3 区に分布する。3 区では、西に向かって下がる斜行層理が観察できた。第 6J 層は黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土～シルトの止水性の堆積で上部に褐鉄が沈殿する。層厚は 2～5 cmある。1 区北端部と 2 区および 3 区に広く分布する。第 6K 層は浅黄色 (2.5Y7/3) 中～細粒砂の流水性の堆積で、上方に向かって細粒化する。層厚は 5～10 cmある。2 区のみにある。上位の第 6J 層と一連の水成層の可能性もある。第 6L 層は暗灰黄色 (2.5Y5/2) 中粒砂の流水性堆積で、上方に向かって細粒化する。層厚は 5～15 cmある。2 区のみにあるが、1 区の層 23 はこの地層の可能性のある。この細分層は第 6 層の最下部を形成し、第 7 層を直接覆う。第 7 層が無い部分では、第 8 層を直接覆う。第 6 層全体からは京都 X 期古段階から新段階にかけての土師器皿が出土する¹¹⁾。3 区では第 6 層中の比較的下位の細分層である第 6J 層と第 6H 層からの出土遺物を抽出でき、両層からは京都 X 期新段階 (16 世紀後半) の土師器皿が出土した (図 32)。また、1 区北東拡張区では、第 6F 層から同じく京都 X 期新段階の土師器皿が出土した (図 32)。2 区では第 6 層中の比較的上位の細分層である第 6B 層を覆う地層から、17 世紀前半代の遺物が出土している。以上により、第 6 層は全体的に 16 世紀後半から 17 世紀前半にかけての地層である。

第 7 層 第 7A 層と第 7B 層に細分できる。第 7A 層は暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルトで、



- I期の盛土
 □ II期の盛土
 □ III期の盛土
- 1 2.5Y4/2暗灰黄色シルト、褐鉄の沈殿あり (第4層の一部か)
 2 2.5Y3/1黒褐色シルト、粗〜極粗砂および礫を含む (溝埋土)
 3 2.5Y3/3暗褐色シルト、褐鉄の沈殿あり (溝埋土)
 4 7.5YR3/1黒褐色シルト (溝埋土)
 5 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト (土坑埋土)
 6 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト、上部に褐鉄の沈殿あり
 7 2.5Y4/2暗灰黄色シルト (溝29埋土)
 8 2.5Y3/2黒褐色シルト (溝29埋土)
 9 2.5Y3/2黒褐色シルト (溝29埋土)
 10 7.5YR2/2黒褐色シルト (溝29埋土)
 11 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト (堤30表面の土壌化層)
 11' 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト (堤30表面の土壌化層)
 12 2.5Y4/2暗灰黄色シルト (II期の堤30上の整地層)
 13 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト (II期の堤30上の整地層)
 14 10YR4/2暗灰褐色シルト (II期の堤30上の整地層)
 15 2.5Y4/2暗灰黄色シルト (II期の堤30盛土)
 16 10YR3/3暗褐色シルト (II期の堤30盛土)
 17 2.5Y4/2暗灰黄色シルト、褐鉄の沈殿あり (土壌層)
 18 2.5Y5/3暗褐色シルト、止水性の堆積で褐鉄沈殿あり
 19 10YR4/2暗灰褐色シルト (溝33埋土)
 20 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト～2.5YR4/4赤褐色粗砂 (溝33内の水成層)
 21 2.5Y4/2暗灰黄色シルト、土壌の流入層
 22 2.5Y6/3にぶい黄褐色中～粗砂、流水性の堆積
 23 10YR5/6黄褐色シルト (整地層)
 24 10YR1.7/1黒色シルト、上面に水成微砂の薄層あり (整地層)
 25 5Y2/1黒色シルトと2.5Y4/2暗灰黄色粗砂の混合層 (I期の堤30上の整地層)
 26 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト (I期の堤30盛土)
 27 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト (I期の堤30盛土)
 28 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト (I期の堤30盛土)
 29 10YR3/3暗褐色シルト (I期の堤30盛土)
 30 10YR3/2黒褐色シルト (I期の堤30盛土)
 31 2.5Y2/1黒色シルト (旧地表の土壌層 第9層の一部)
 32 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂、流水性堆積 (溝6埋土)
 33 2.5Y5/2暗灰黄色シルト (溝11・12上部の窪みの人為的埋土)
 34 2.5Y4/2暗灰黄色シルト (溝11・12上部の窪みの人為的埋土)
 35 2.5Y3/2黒褐色シルト、36とは一連か (溝11埋土上部)
 36 2.5Y3/2黒褐色シルト、38とは一連か (溝12埋土上部)
 37 5Y2/2オリーブ黒色シルト、肩口からの流入土 (溝11埋土)
 38 2.5Y3/1黒褐色シルト、植物遺体を含む止水性堆積 (溝11埋土)
 39 2.5Y3/2黒褐色中～極粗砂、流水性堆積 (溝11埋土)
 40 2.5Y3/2黒褐色シルト、肩口からの流入土 (溝12埋土)
 41 2.5Y4/1黄褐色シルト、肩口からの流入土 (溝12埋土)
 42 2.5Y4/2暗灰黄色シルト、肩口からの流入土 (溝12埋土)
 43 2.5Y3/1黒褐色シルト、植物遺体を含む止水性堆積 (溝12埋土)
 44 5Y3/2オリーブ黒色粗砂、流水性堆積 (溝12埋土)
 45 2.5Y3/1黒褐色シルト (溝12埋土か)

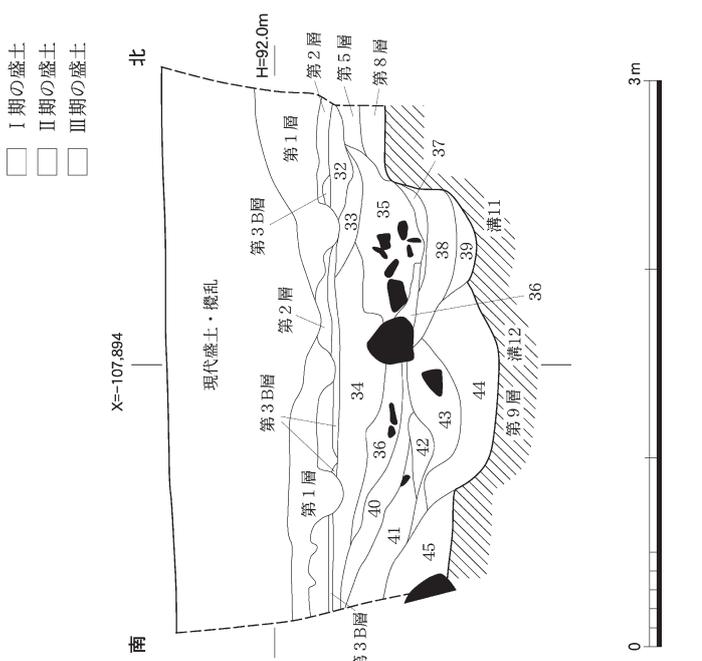


図5 1区西隣断面図 (1:40)

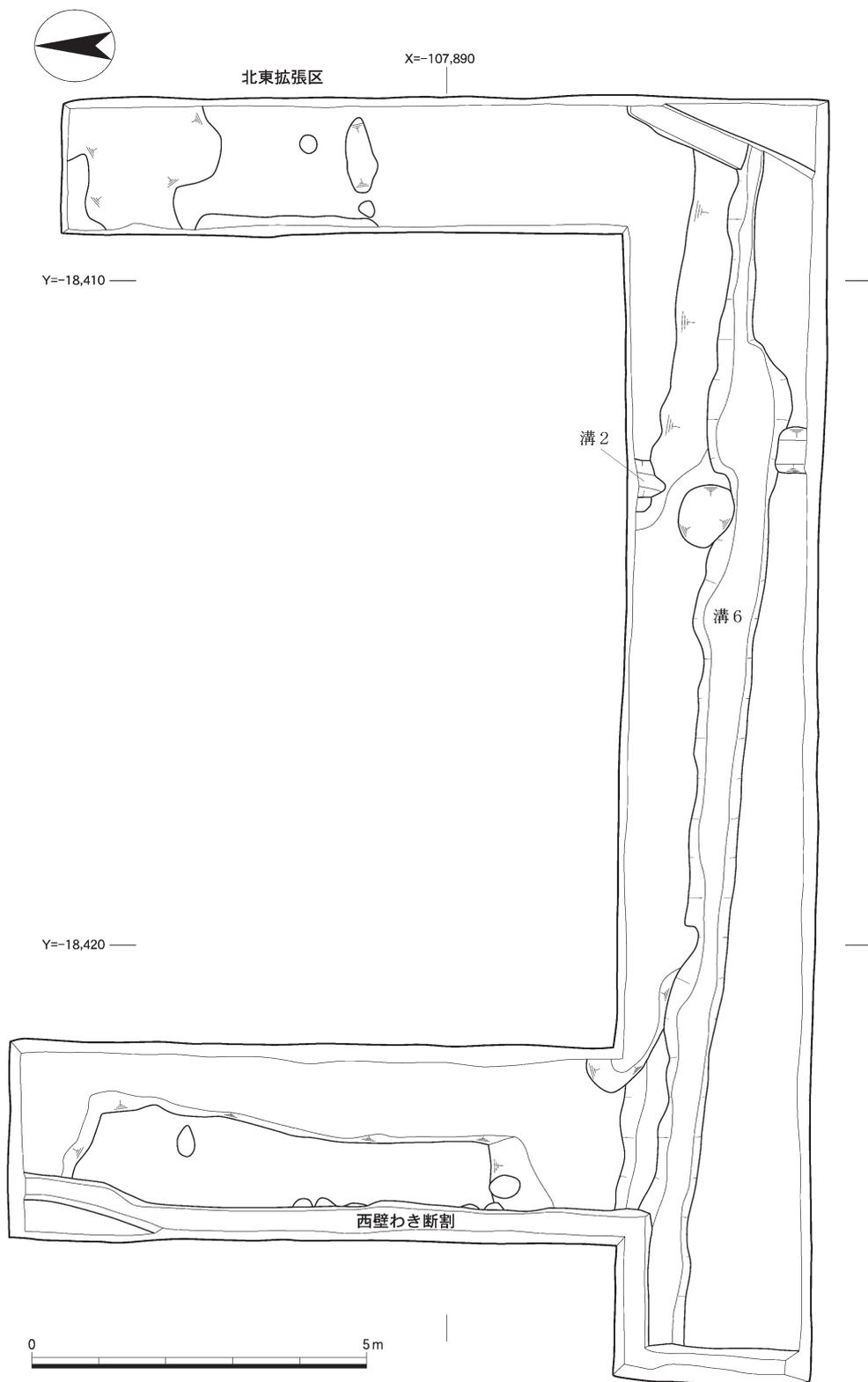


図6 1区第4層上面遺構平面図(1:100)

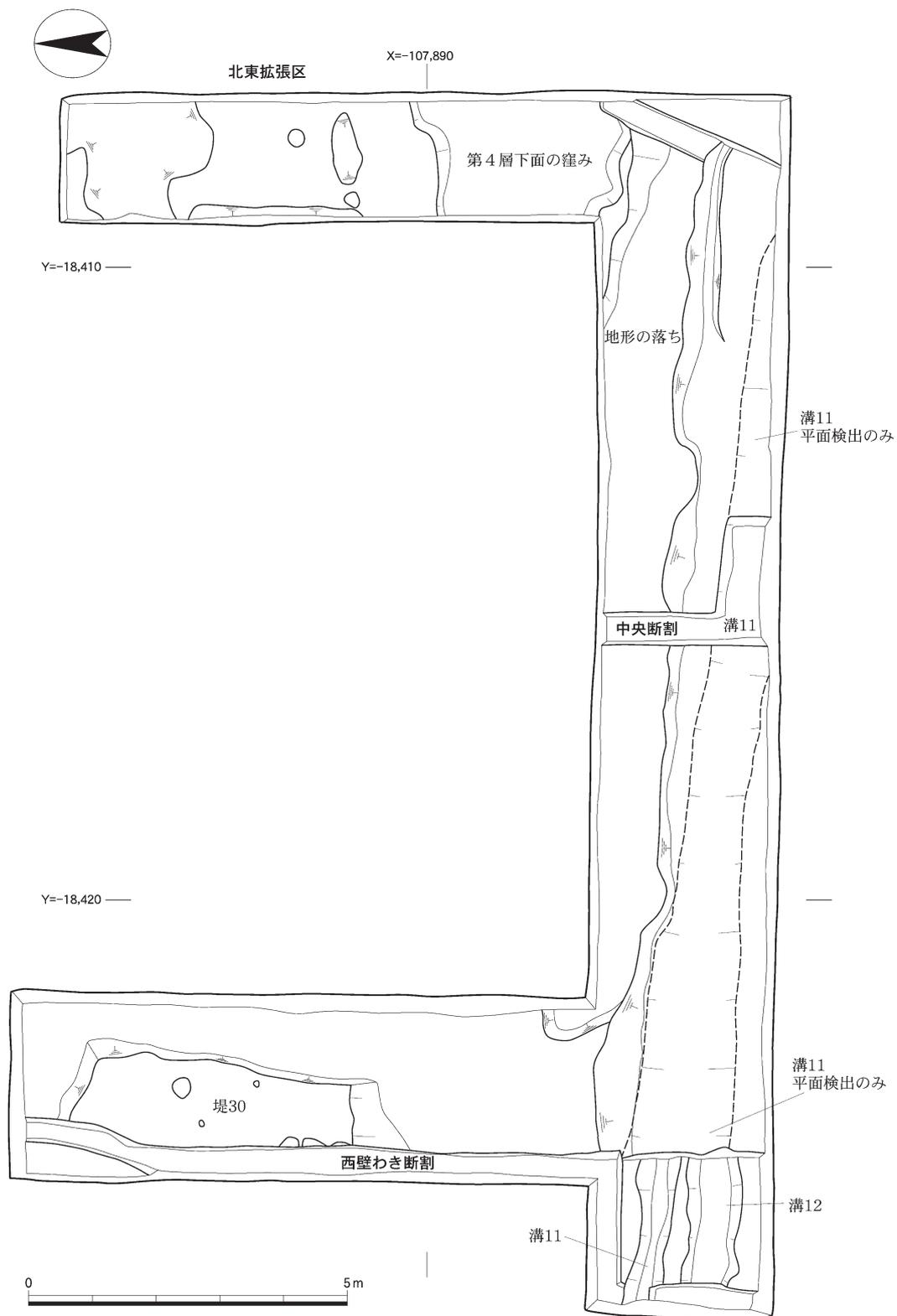


図7 1区第5層上面遺構平面図(1:100)

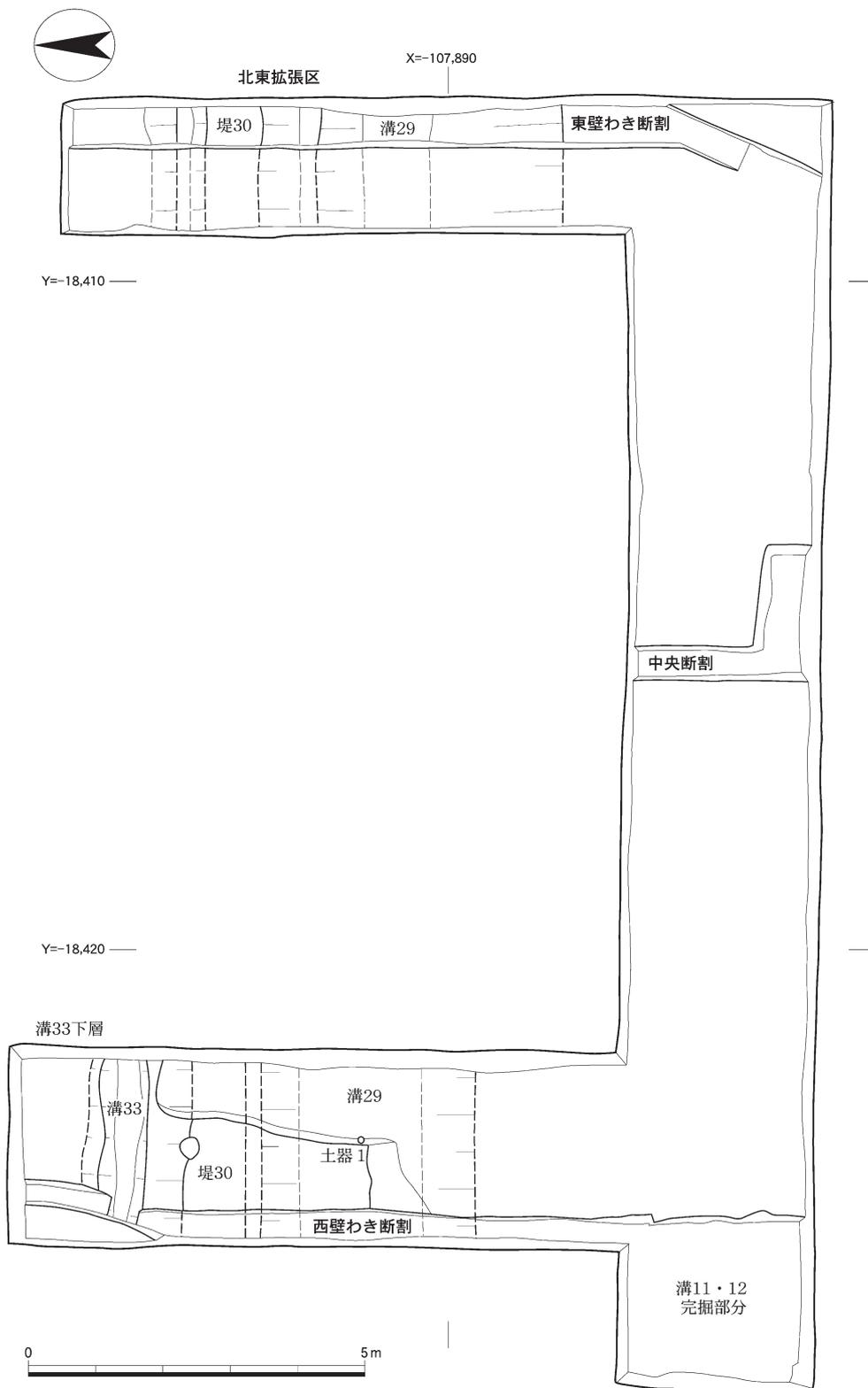


図8 1区第8層上面遺構平面図(1:100)

層厚 20～30 cmある。第7B層は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトで、層厚は20～60 cmある。2区のみにある。2区の背後の台地上から崩落した表土層の二次堆積層である。上位を第6層が覆い、京都X期中段階の土師器皿が出土している(図33・34)。以上により、16世紀前半から中頃に堆積した地層である。なお、1区の層22は第7層に対応する可能性がある。

第8層 第8層は地点によって層相は様々である。1区南半と3区では暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト、1区北端部ではオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト、1区東端ではオリーブ黒色(5Y3/2)シルト、2区では黒褐色(2.5Y3/1)シルトである。いずれも、炭化物を含み、上部に褐鉄の沈殿がある。遺跡の基盤を形成する第9層を直接覆い、層厚は15～20 cmある。1区北端部では、上面を流水性の中～粗粒砂(層23)が覆う。第8層からは時期が明確な出土遺物はないが、東山殿・慈照寺造営時から初期段階での整地層もしくは土壌化した表土層と判断する。

第9層 暗灰黄色(2.5Y4/2)中～粗粒砂で、流水性の堆積である。層厚は60 cm以上ある。東山殿・慈照寺の基盤を形成する地層である。層中に旧地表と判断できる層厚2～4 cmの土壌層2層以上を挟みこむ。遺物を含まないため時期は不明であるが、地形環境から沖積層上部層と判断する。平成15年(2003)度の調査では、後世の層中よりわずかながら縄文土器の小片が出土しているが、本層中の土壌層面は、先史時代の遺構面の候補となるものである。

1区の平面的な調査は、第2層上面(幕末以降面)、第4層上面(江戸時代後半期面)、第5層上面(江戸時代前半期面)で実施し、それより下層は第6層を除去した以外は断割調査とした。なお、第2層上面検出遺構は近現代のものであったため、報告の対象から除外した。

2) 第4層上面の遺構(図版1、図6)

江戸時代後半期の遺構面である。遺構面は北が高く、南に緩やかに下がる。遺構には、溝2と溝6がある。

溝2 幅約0.6 m、深さ約0.15 mある南北方向の溝で、長さ0.4 m分検出した。断面形はU字形である。南側は現代の攪乱によって壊され、北側は調査区外に延びる。検出部分のみの所見では、溝底は北が高く、南に向かって下がる。埋土は黒色のシルト層であるが、自然の営力による堆積か人為的なものか不明である。埋土から17世紀後半代の国産磁器片が出土したが、掘り込み面の地層から棧瓦片が出土していることから、18世紀以降の遺構と判断する。性格は不明である。

溝6 幅0.7～1 m、深さは0.1～0.3 mある東西方向の溝である。長さ約18 m分検出し、西側と東側は調査区外に延びる。断面形はU字形である。近現代の耕作土と現代の攪乱坑によって上部が削平されている。埋土は下層が流水性の粗砂で、上層のシルトは自然の流入土か人為的な埋土か不明である(図5)。溝底の高さは西端部が東端部より約0.1 m低い。埋土から18世紀後半から19世紀にかけての土器陶磁器類が出土した(図31)。18世紀後半以降の遺構である。埋土の状況から水路と考えられる。溝底の高さから、流水方向は東から西である。

3) 第5層上面の遺構 (図版1、図7)

江戸時代前半期の遺構面である。西端部では遺構面は北が高く、南に下がるが、これは第8層上面遺構の堤30の高まりが、この段階まで残存するからである。遺構には、溝11と溝12がある。溝12が古く、溝11が新しい。しかし、溝11が埋没した後も両溝の上部には窪地が残る。この窪地は18世紀後半に人為的に埋められている。

溝11 幅1～1.5 m、深さ0.7 mある東西方向の溝である。断面形はU字形である。長さ約17 m分検出し、西側と東側は調査区外に延びる。遺構の保護のため、部分的に溝底まで掘削し、他は平面検出にとどめた。埋土は下層が流水性の中～極粗砂、中層が植物遺体を含む止水性のシルト、上層が肩口からの流入土である(図5)。溝底の高さは西端部が中央断割部分より約0.25 m低い。埋土からは多くの17世紀前半の遺物とともに、少量の17世紀後半の土器陶磁器類が出土した(図31)。17世紀後半の遺構である。埋土の状況から水路と考えられる。溝底の高さから、流水方向は東から西である。

溝12 幅0.8 m以上、深さ0.8 mある東西方向の溝である。断面形はU字形である。北側の肩が溝11によって壊されているため、検出幅は不明である。長さ約10 m分検出し、西側と東側は調査区外に延びる。遺構の保護のため、部分的に溝底まで掘削し、他は平面検出にとどめた。埋土は下層が流水性の粗砂、中層が植物遺体を含む止水性のシルト、上層が肩口からの流入土である(図5)。埋土から17世紀前半から中頃の土器陶器類が出土した(図31)。17世紀前半から中頃にかけての遺構である。埋土の状況から水路と考えられる。西端部と比較し得る溝底の高さのデータが無いので、流水方向は不明である。

4) 第8層上面の遺構 (図版1、図8)

室町時代後半期の遺構面である。この面は平面的な調査を行っていないが、西壁わき断割の断面観察から遺構の存在を確認し、この所見に基づいて、東壁わきの断割範囲内で室町時代面の検出を試みた。また、北西端部の第6層を掘り下げ、その下面を調査した。遺構には、溝29、堤30、溝33がある。溝29は堤30の南側に、溝33は堤30の北側に取り付く溝である。

溝29 西壁わき断割と東壁わき断割で確認した。確認箇所は離れるが、平面的な位置関係から一連の東西溝と判断した。断面形は逆台形で、幅は西壁わきで約3.0 m、東壁わきで約3.6 mある。北肩口は、後述する堤30の南側斜面と一連である。深さは東壁わきで堤30頂部から溝底までが1.1 m、南の肩口から溝底までが0.9 mある。西壁わきでの深さは、堤30頂部から溝底までが約1.0 m、南の肩口から溝底までが約0.5 mである。方向は、ほぼ国土座標系の東西に一致する。埋土は、東壁わきと西壁わきでかなり様相が異なる。東壁わきでは、下層は止水性の水成シルト層が厚く堆積し、上層は肩口からの流入土や崩落土で埋まる。また、埋土の最上部には第6F層と第6G層が堤30の頂部を超えて流入している。これに対して、西壁わきでの溝29の埋土は、最下部から最上部まで肩口からの流入土あるいは人為的な埋土である。溝底の高さは、西壁わきより東壁わ

きが約 0.2 m 低く、東側は水が溜まりやすい状況にあった。これが、東西で埋土が異なる原因であろう。東壁わきでは、埋土上層の流入土・崩落土から京都X期新段階の土師皿が出土している（図 35）。また、下層の水成シルト層からも、図化できない小片ながら京都X期新段階の土師皿が出土している。以上により、溝 29 は 16 世紀後半には完全に埋没した遺構であり、掘削されたのも 16 世紀後半をそれほど遡らない時期と判断できる。遺構の性格については、「5. まとめ」で言及する。



図9 1区北東拡張区東壁わき断割状況（北西から）

堤 30 西壁わき断割と東壁わき断割で確認した。確認箇所は離れるが、平面的な位置関係から一連の東西方向の堤と判断した。台形の断面形を呈する土塁状の盛土である。東壁わきでは基底部の幅 3.3 m、頂部の幅 0.4 m、北側基底部からの高さは約 0.6 m である。南側の高さについては溝 29 の深さとして既に記した。西壁わきでは基底部の幅約 2.5 m、頂部の幅約 0.7 m、北側基底部からの高さ約 0.5 m である。南側の高さについては溝 29 の深さとして既に記した。東壁わきでは、堤の頂部は第 6 F 層や第 5 層によって整合的に覆われているため、本来の高さを維持しているが、西壁わきでは頂部は近現代の耕作土である第 1 層によって削平を受けている。方向は、ほぼ国土座標系の東西に一致する。西壁わきの断割で、盛土の積み上げ状況が判明している（図 5）。堤の盛土は 3 段階にわたる積み上げが認められる。これを古いほうから I 期、II 期、III 期とする。各段階は堤 30 構築時の作業工程を示すものではなく、堤の最初の構築と後の 2 回の改修を示すものと判断できる。その根拠を述べる。I 期の盛土の北側裾部を 2 層の整地層が覆う。2 層の整地層の層界には水成微粒砂の薄層が観察できる。また、整地層の上には流水性の中～粗粒砂が乗る。この中～粗粒砂は I 期の盛土の北側斜面を削りこんでいる。II 期の盛土は、I 期の盛土とこれに伴うこれらの整地層と自然堆積層を覆う。また、I 期の盛土の最上位には硬くしまった薄い整地層があり、上面に褐鉄の沈殿が顕著である。これらの事実は I 期の盛土が一定の期間露出していたことを示すものである。同様に II 期の盛土の上面も硬くしまった薄層と顕著な褐鉄の沈殿が見られる。以上により、3 段階の盛土は 2 度の改修を経て、規模を大きくしていったものと判断できる。I 期の堤は、基底部の幅約 1.7 m、頂部の幅約 0.8 m、高さ約 0.55 m という小規模なものである。II 期の堤は、基底部の幅約 2.5 m、頂部の幅約 1.5 m、高さ約 0.6 m である。I 期と高さはあまり変わらないが、幅が広がっている。III 期の堤の規模については、すでに述べている。なお、溝 29 は断面形と埋没状況により、III 期に伴う遺構である事は明らかである。したがって、I 期と II 期の盛土は、溝 29 掘削時に南側斜面を削られている可能性がある。盛土の内部から明確な出土遺物を得ていないが、III 期は溝 29 に伴うものであることや、16 世紀後半の第 6 層が北側斜面を覆うことから、16 世紀後半には埋没した遺構である。I 期の盛土は 9 層上面から積み上げられおり、8 層に先行するか 8 層と同時である。したがって、I 期の堤は 15 世紀後半の東山殿・

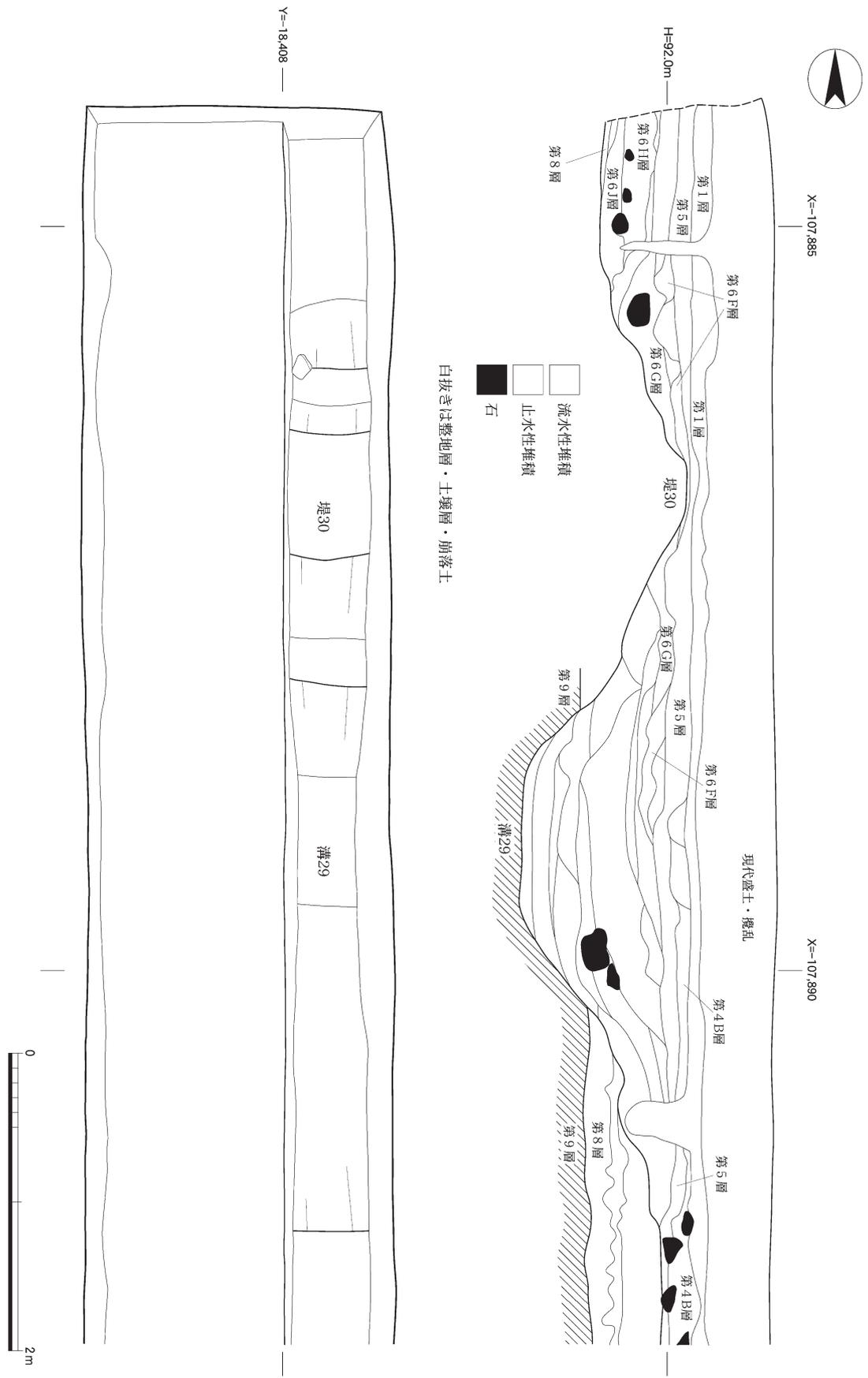


図10 溝29・堤30実測図(1:40)

慈照寺造営期に構築されたと考える。Ⅱ期の堤については、16世紀前半から中頃に構築されたと推定しておきたい。遺構の性格については、「5. まとめ」で言及する。

溝 33 堤 30 の北側基底部に取り付く東西溝であるが、東壁わきでは確認していない。幅約 0.9 m、深さ約 0.35 m あり。長さ 2.7 m 分確認し、東と西は調査区外に延びる。断面形は U 字形である。埋土は上層が第 6 層と一連の水成砂層で、下層は肩口からの流入土である。上層のみ掘り、下層は掘り残した。埋土から遺物は出土していないが、Ⅲ期の堤 30 と同時に第 6 層によって埋没していることから、16 世紀後半の遺構である。遺構の性格については、「5. まとめ」で言及する。

(2) 2 区の遺構

1) 基本層序と遺構検出面 (図 11)

西半では現地地表下 20 ~ 30 cm の現代盛土層下に第 1 層が広がり、その下には第 6 層から第 9 層にかけての堆積が確認できた。東半では現地地表下 40 cm の現代盛土直下に第 9 層がある。調査は第 6 層上面で行い、この遺構面で検出した溝 5 を残しながら、部分的に第 8 層上面を調査した。

2) 第 6 層上面の遺構 (図版 2、図 12)

江戸時代前半期以降の遺構面である。既存建物の基礎により、調査区の四壁と中央部の遺構面が溝状に破壊されていたが、遺構面残存部分で、柱穴 43、土坑 37 ~ 40、溝 5 を確認できた。

柱穴 43 平面形は円形で直径約 0.3 m、深さ 0.22 m あり。中央に直径 12 cm の円形の柱痕跡が確認できる。埋土は暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルトである。埋土から遺物は出土していないが、埋土の色調などから江戸時代後半期以降の遺構と判断する。

土坑 37・38・39・40・44 第 8 層上面遺構までの掘り下げ壁面で、いくつかの土坑の埋土を確

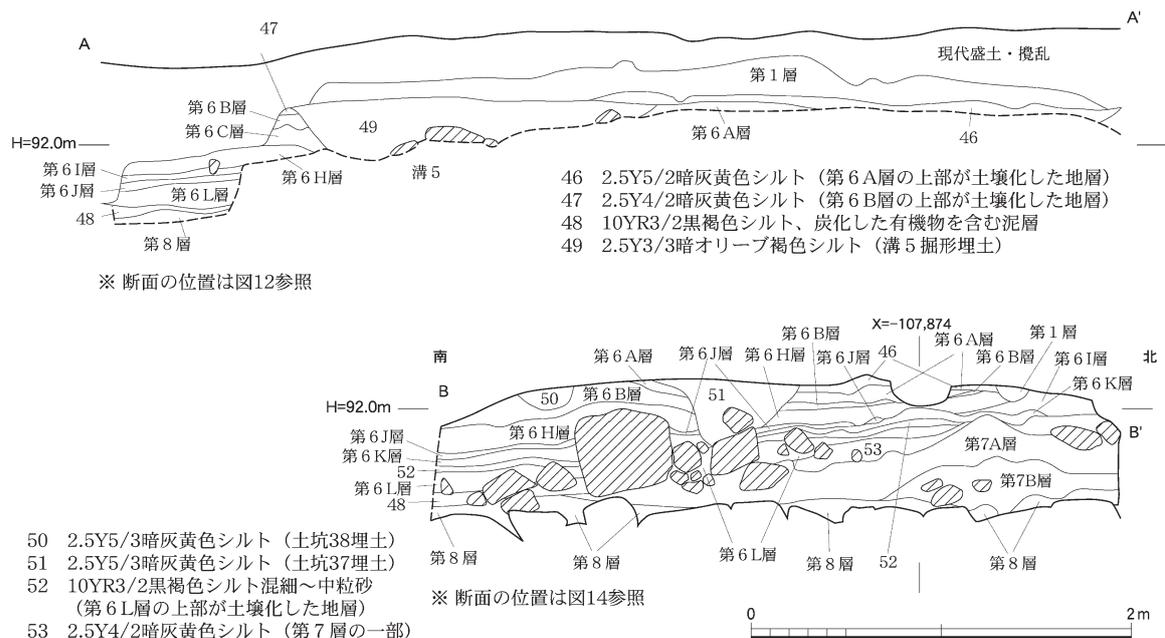


図 11 2 区地層断面図 (1 : 40)

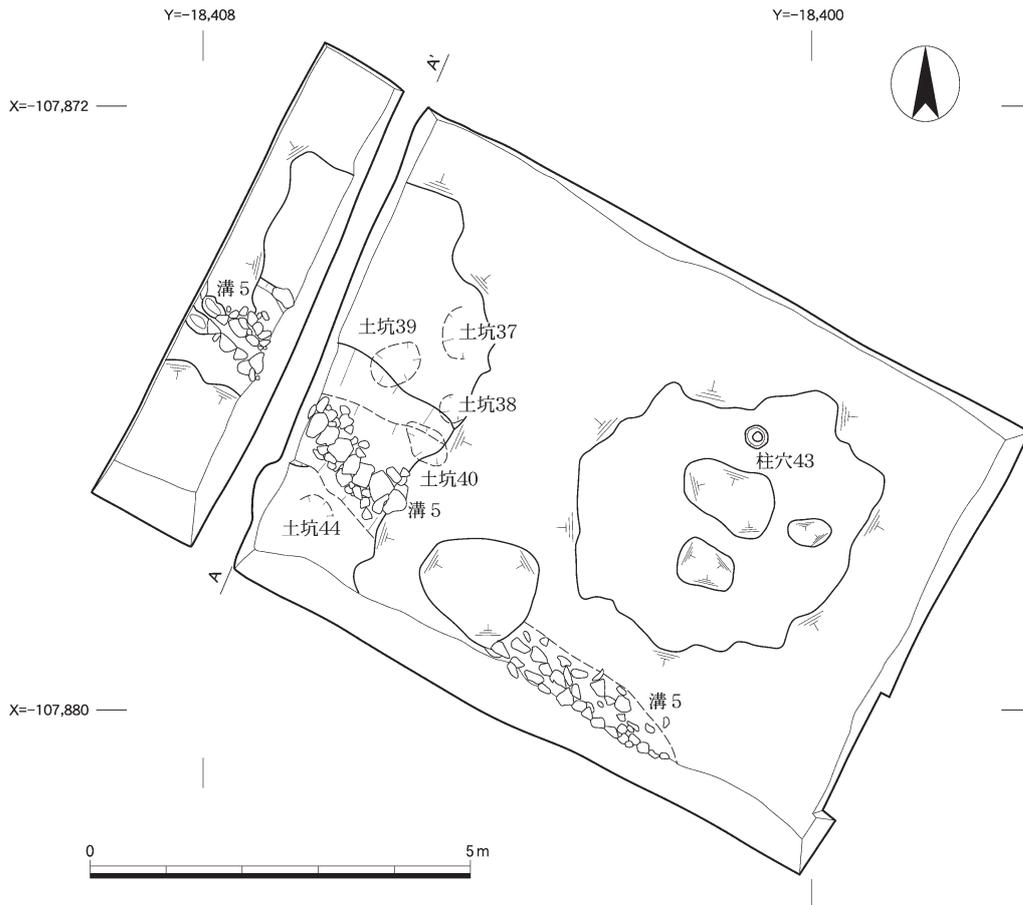


図12 2区第6層上面遺構平面図（1：100）

認した。このため第6層上面を再度精査したところ、4基の小土坑を確認した。平面でのみ確認し、埋土を掘っていない。平面形は不定形で、長軸の長さは0.4～0.7 mある。断面で確認できるものに関しては、深さ0.1～0.4 mある。埋土は、暗灰黄色（2.5Y5/3）シルトである。平面確認したのみなので出土遺物を得ていないが、17世紀前半頃と思われる瓦片を含む。江戸時代前半期の遺構と判断する。

溝5（図13）北西から南東方向の石組の暗渠溝である。北で西に約45°振る方向である。幅3.0～4.0 mの素掘り溝の中央部に、長さ0.2～0.3 m、幅0.1～0.15 mの礫1段を併行に2列並べて溝とし、その上部に幅、長さとも0.3 m程度の礫をかぶせ、土で覆い溝を埋め戻している。北西壁付近と南東壁付近では、既存建物の基礎によって上部が破壊され、蓋石が残存していない。用いられている石材は、花崗閃緑岩、黒雲母花崗岩、花崗斑岩など花崗岩系の礫が主体である。溝本体を構築する石材67点の礫種の内訳は、花崗閃緑岩42点（62.7%）、黒雲母花崗岩12点（17.9%）、花崗斑岩11点（16.4%）、その他2点（3.0%）である。検出部分の中央部が既存建物の基礎で破壊されているが、全長約8.0 m分検出し、北西方向と南北方向とも調査区外に延びる。検出部分の南東端は北西端よりも約0.25 m低く、水流は北西から南東方向である。溝埋土には水成堆積が見られず、被覆土と同様の土砂が侵入している。被覆土は暗オリーブ褐色（2.5Y5/3）シルトである。被覆土から京都X期新段階の土師器皿が出土している。また、瓦が77片出土してい

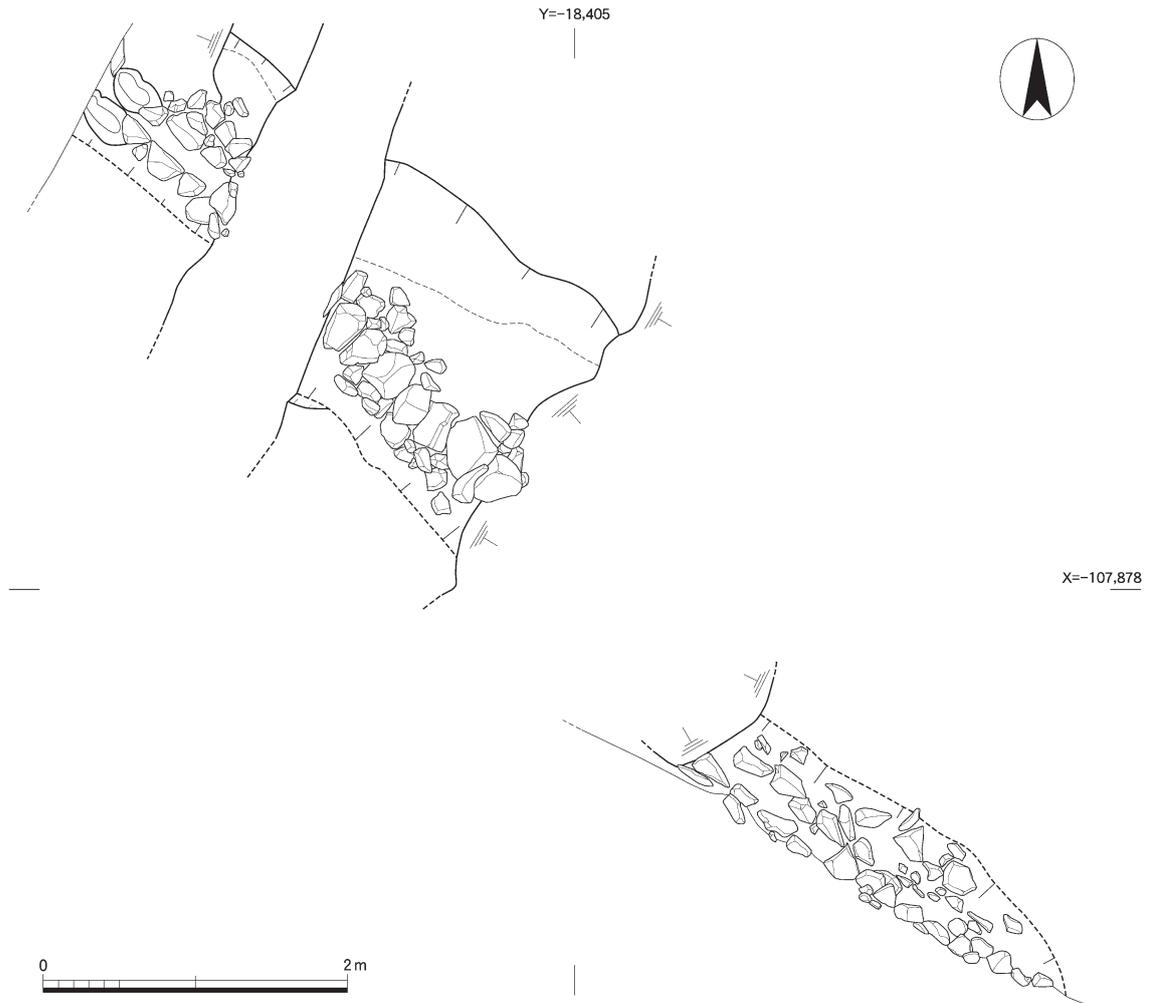


図13 溝5平面図（1：50）

る。このうちコビキ痕が観察できる破片が7点あり、コビキAが3点、コビキBが4点ある。¹²⁾したがって、この遺構の年代は16世紀末から17世紀前半である。北側の台地上から南の低地に向けて、排水あるいは導水の機能を果たした溝である。

3) 第8層上面の遺構（図版3・4、図14）

室町時代後半期の遺構面である。この面では、15世紀後半から16世紀初頭に築造された石垣7と石組の溝8を検出した。両者は一連の作業で構築された一連の遺構である。この他に落ち42、石組45がある。

石垣7（図15・16）東西方向から直角に曲がって北側に延びる花崗岩系の石材を用いた石垣である。方向はほぼ国土座標系の東西に乗る。後述する石組の溝8の肩口から犬走り状の控えを0.1～0.2m分とり、そこから石を積む。長軸の長さ0.5～1.2mの自然石と割石を用いた石垣基底部分が1段分残る。これより上に1～2段の石を積み上げていたと思われるが、第7層および第8層を堆積させた台地斜面の崩落と洪水によって倒壊している。周囲の第7層および第8層は、石垣を構築していたと思われる巨石数個と間詰石、介石、裏込めの栗石に用いられたと思われる小

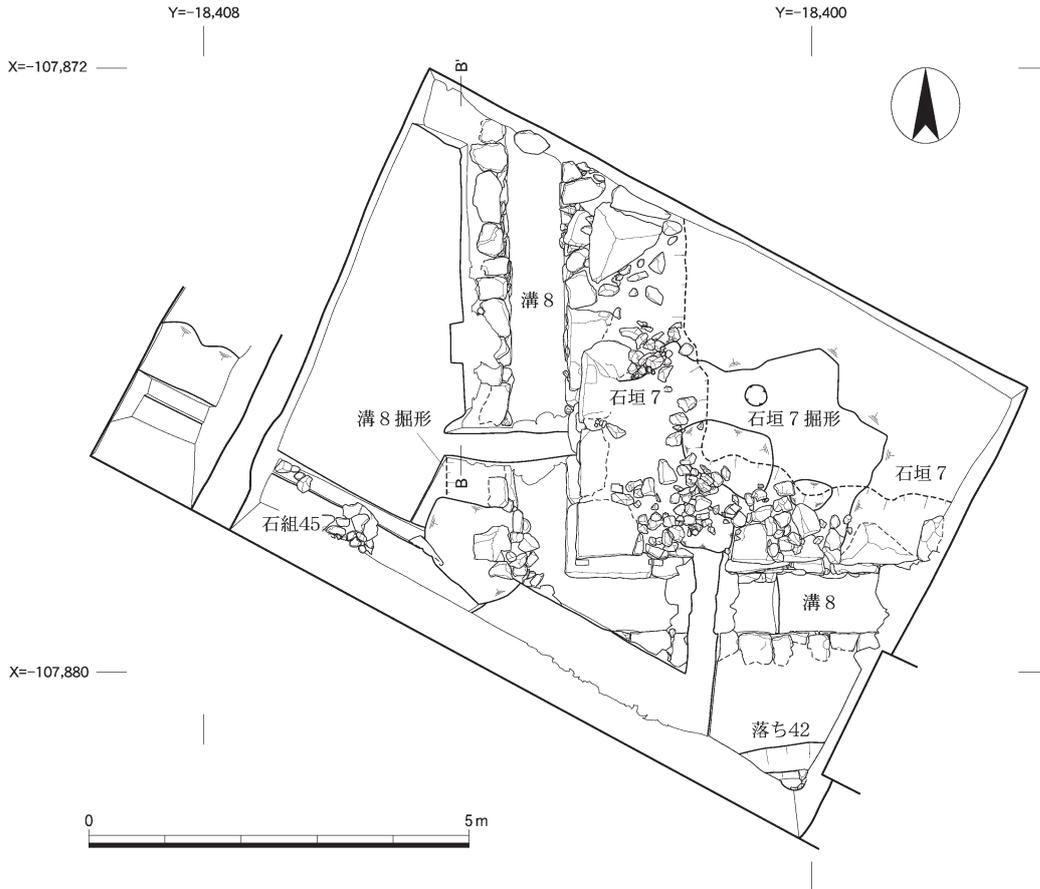


図14 2区第8層上面遺構平面図(1:100)

振りの礫を多量に含んでいる。1段分残る石の高さは約0.5 mである。東西方向は5石約4.5 m分検出し、東側は調査区外に延びる。南北方向は南半の3石約3.0 m分が原位置を保ち、北半には原位置を保たない1石が残るのみである。石垣の面から奥に約1.5 mの部分に掘形を検出している。掘り込み面は第9層である。掘形の埋土はオリブ褐色(2.5Y4/3)シルトで、長軸の長さ0.1～0.3 mの栗石が多量に詰まる。栗石は間詰石や介石と同程度の大きさであり、石垣7上面に露出した部分ではそれぞれの区分は困難であった。石垣7北東の高所は現地表下約0.4 mで第9層面となる。角石は南辺と西辺の長さがほぼ同じで、算木積みになっていない。この遺構は、北東の台地斜面からの土砂の流出と台地の崩壊を防ぐための擁壁である。なお、この遺構の年代については、次の溝8の記述で触れる。

溝8(図15～17) 石垣7の外面に平行に取り付く花崗岩系の石材を用いた石組溝である。石垣7は溝8最上部の石組上に構築されている。埋土の上半のみ掘り、下半は遺構の保存のため掘り下げていないが、溝の深さの確認のため、東西部分中央の1箇所を断ち割り、溝の深さと底部の造作および堆積層の状況を確認した。幅約0.8 m、深さ約0.95 mある。東西方向は約5.3 m分検出し、東は調査区外に延びる。南北方向は約6.0 m分検出し、北は調査区外に延びる。石垣の下部になる石積みと対面の石積みで構築法が異なっている。溝の北面と東面、すなわち石垣7の下部になる部分は、長軸の長さ約0.5～1.2 mの比較的大きい石を用いている。とりわけ最上部

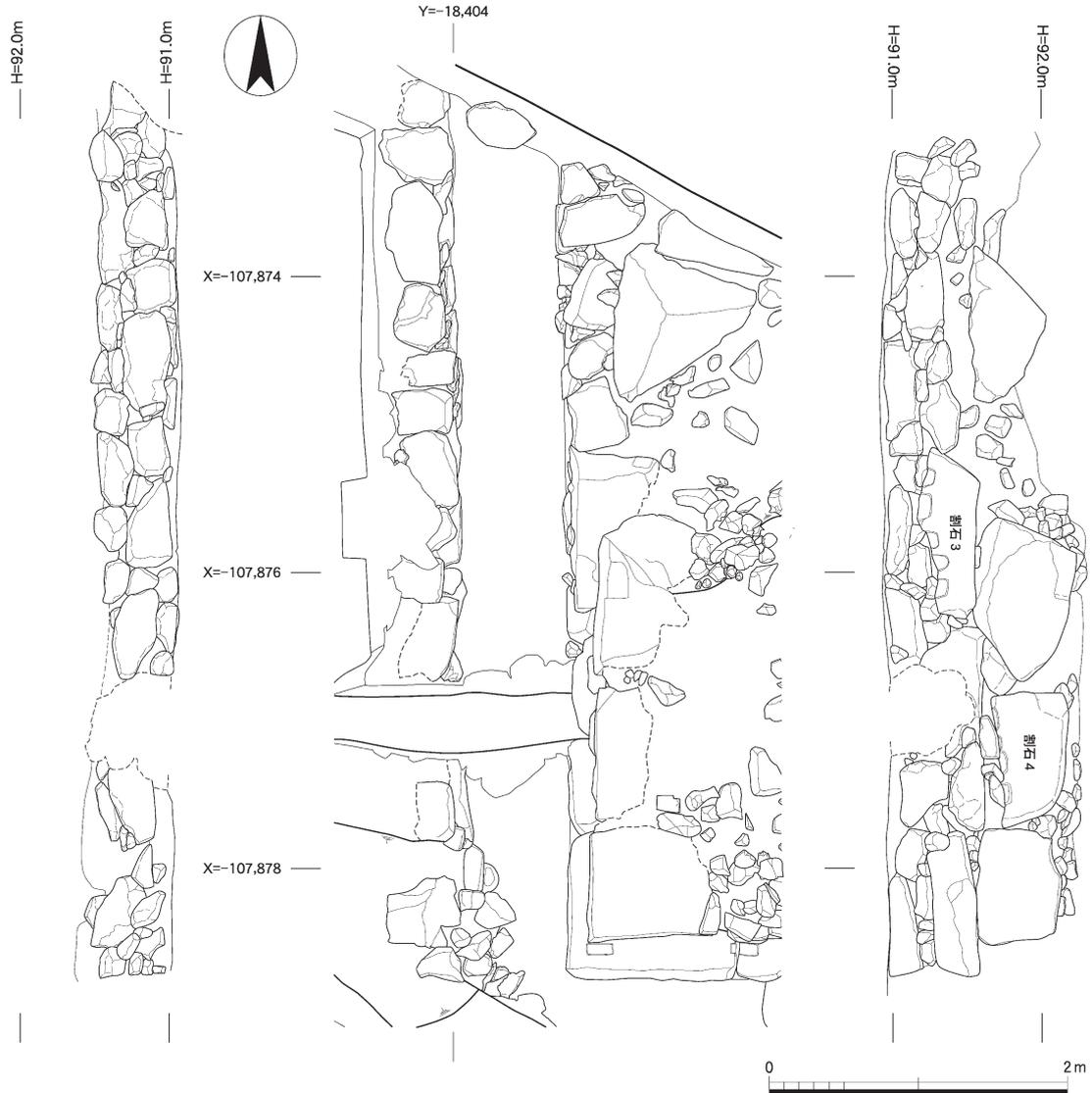


図 15 石垣 7・溝 8 実測図 1 (1 : 50)

の石材が大きい。石垣を支えるための強度の確保と石垣基部を安定した平面に整えるためであろう。長軸の長さで比較すると、石垣 7 の石材と同じ大きさとなるが、石垣 7 の石材より薄いものが選ばれている。石積みは掘り下げた部分でおよそ 2 段、断割部分で 3 段ある。最上部の石と 2 段目の石との間には、長軸の長さ約 0.2 m の小石材を噛ませて天端を調整している。石溝の南面と西面、すなわち石垣の対面側は、長軸の長さ 0.3 ~ 0.7 m の石を用い、石垣 7 下の石材よりかなり小振りである。天端の調整も石垣 7 下部分のように小さな石材を顕著に用いることなく、大きさが整った石材を要領よく積み上げて天端を揃えている。石積みは掘り下げた部分で 2 ~ 3 段、断割部分で 3 ~ 4 段ある。南北溝部分の南端西面は攪乱坑によって石積みが大きく崩れている。この攪乱坑の北壁面で溝 8 の掘形が確認できた。石積みの面より約 0.8 m 奥である。埋土は黒褐色 (2.5Y3/1) シルトで、第 9 層土が二次的に混入する。長軸の長さ 0.1 ~ 0.2 m の栗石が入るが、石垣 7 の裏込めほど顕著ではない。溝埋土は、下層が流水性の粗砂で、その最下部と中位に土壌化した薄層がある。上層は、石垣 7 上部からの崩落土である第 7 B 層である。その上からさらに

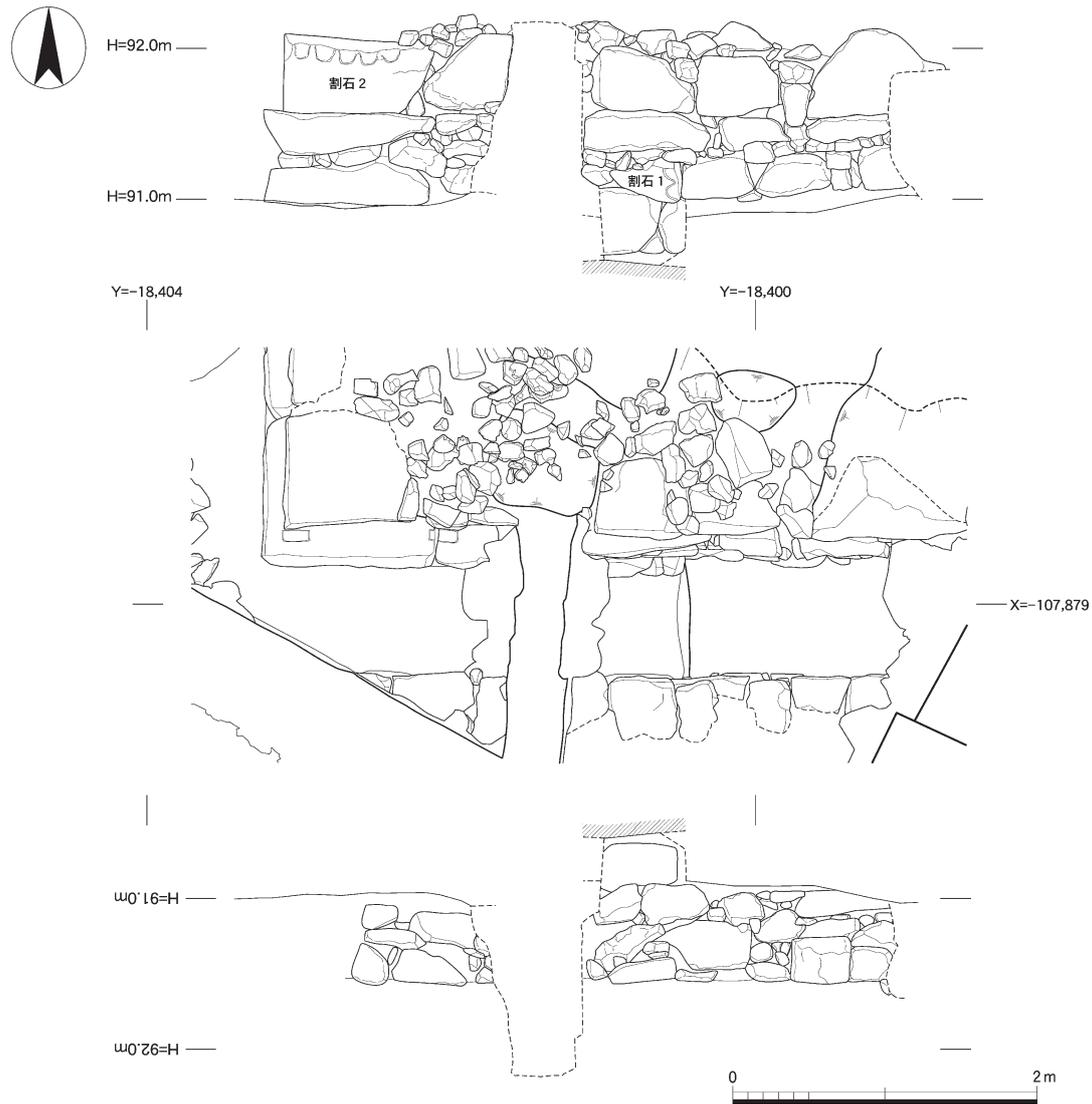


図 16 石垣 7・溝 8 実測図 2 (1 : 50)

第 7 A 層が覆い、石垣 7 の石材を覆い隠している。下層からは京都 X 期古段階の土師器皿が出土している。上層の第 7 B 層から、京都 X 期中段階の土師器皿が出土している (図 34)。以上により、溝 8 は 16 世紀前半には流水性の堆積により下部が埋まり、16 世紀中頃には上部の石垣と土砂の崩落によって完全に埋没している。この溝の機能は水路であることは疑いなく、石垣擁壁を伴うことから慈照寺の基盤施設であったことは疑いない。また、こうした大規模な土木工事を施工する契機としては、1480 年代の東山殿造営期を想定せざるを得ない。

石垣 7・溝 8 の石材 石垣 7 と溝 8 に使用されている石材は花崗岩系の石材が大半を占め、他にはチャート、砂岩、ホルンフェルスなどがあるが、極めて少量である。花崗岩系の石材には花崗閃緑岩、黒雲母花崗岩、花崗斑岩の 3 種がある。石垣と石組溝の立面に露出する石材で長軸の長さ 0.1 m 以上のものを対象に、種類別に個数をカウントした。カウントした石材は合計 179 点ある。内訳は花崗閃緑岩 139 点 (77.6%)、黒雲母花崗岩 24 点 (13.4%)、花崗斑岩 13 点 (7.3%)、その他 3 点 (1.7%) である。花崗閃緑岩が圧倒的多数を占める。とりわけ、長軸の長さ 1.0 m

を超える石材は、大半が花崗閃緑岩である。黒雲母花崗岩と花崗斑岩は0.6 m以下のものが主体である。したがって、大きめの石材を用いている石垣側の石積みは花崗閃緑岩が大半を占め、小さめの石材を用いる溝の対面は黒雲母花崗岩や花崗斑岩が比較的多い。次に、石垣7の上面に露出した裏込めの栗石と介石の石材も種類別にカウントしてみた。カウントした石材は合計53点ある。内訳は花崗閃緑岩24点(45.3%)、黒雲母花崗岩8点(15.1%)、花崗斑岩12点(22.6%)、その他9点(17.0%)である。花崗閃緑岩が多数を占める状況に変わらないが、比率は半分に満たない。栗石や介石などの小石材は、付近で採集できる自然石が多用されていると見てよからう。

溝8角石の枅穴(図18) 溝8の角石南辺の上面に長方形の枅穴状の加工が2穴ある。同様の穴は他の箇所にはなく、この部分にのみ穿たれている。東側の穴は東隣の石材にまたがって穿たれているため、溝8を構築した後に穿たれていることは明らかである。西側の穴は幅約9 cm、長さ約18 cm、深さ約5 cmある。東側の穴は、穿たれた後に石材がわずかに動いた様子で、南北方向に約1.5 cm、東西方向に約1.5 cm、上下方向に約3.5 cmのズレが生じている。東側の穴を現況で記すと、幅約9 cm、長さは約19.5 cm、深さは角石側が約6 cm、東側の石が約3.5 cmである。2石の間には幅約1.5 cmの間隙があるため、現況の長さからこのズレを引くと東側の穴と西側の穴はまったく同じ平面形となる。また、南北方向のズレを修整すると、両穴の南辺と北

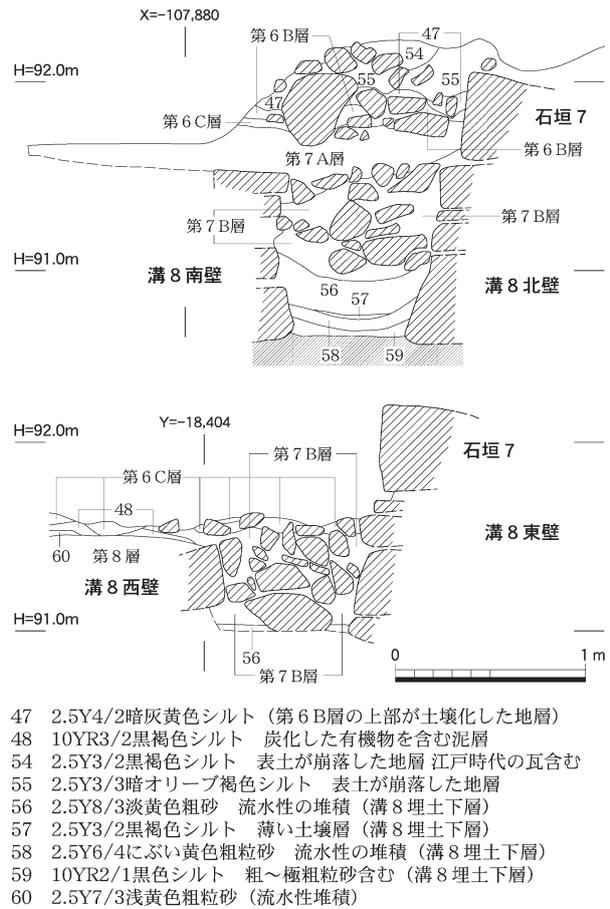


図17 溝8断面図(1:40)

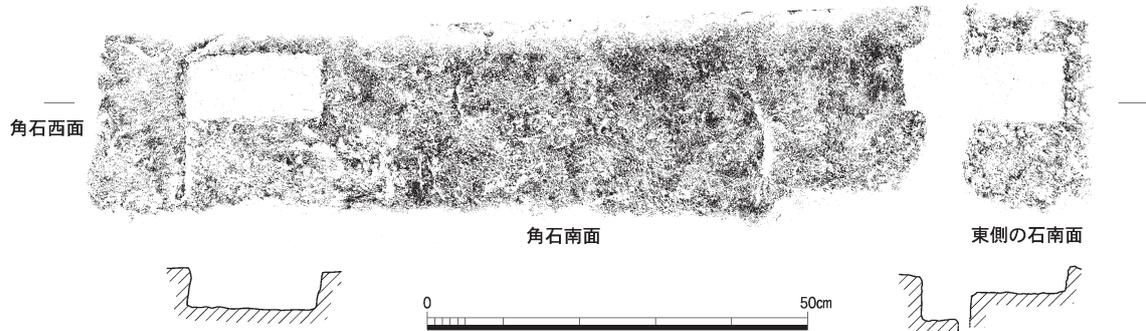


図18 溝8角石拓影・断面図(1:10)

辺は同一直線上にのる。深さが異なるのは、穿孔時に深さよりも底面の高さが重視されたからであろう。この穴の上に枳を有する木材が立ち上がっていたことが想像できるが、どのような構築物であったか現状ではわからない。しかし、溝8が構築された後に穿たれていること、穿たれた後にズレが生じていること、ズレは下方に顕著であることなどを判断材料とすると、この穴が穿たれたのは石垣7が構築される前であったことが推測できる。そうであれば、この穴を利用した構築物は、溝8構築後の石垣7積み上げ工事に必要とされたものであった可能性が考えられよう。

石垣7・溝8石材の加工痕（図19・20）石垣7と溝8の角石のそれぞれ西面にノミによる加工

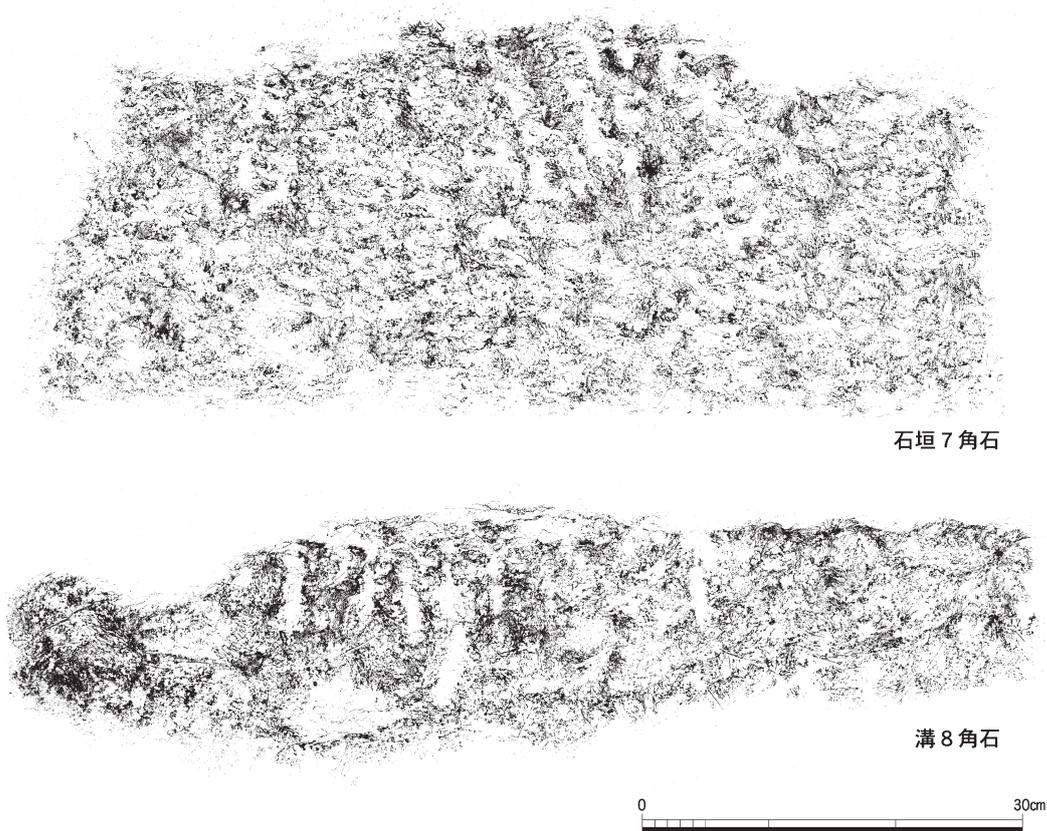


図19 石垣7・溝8角石の加工痕拓影（1：6）

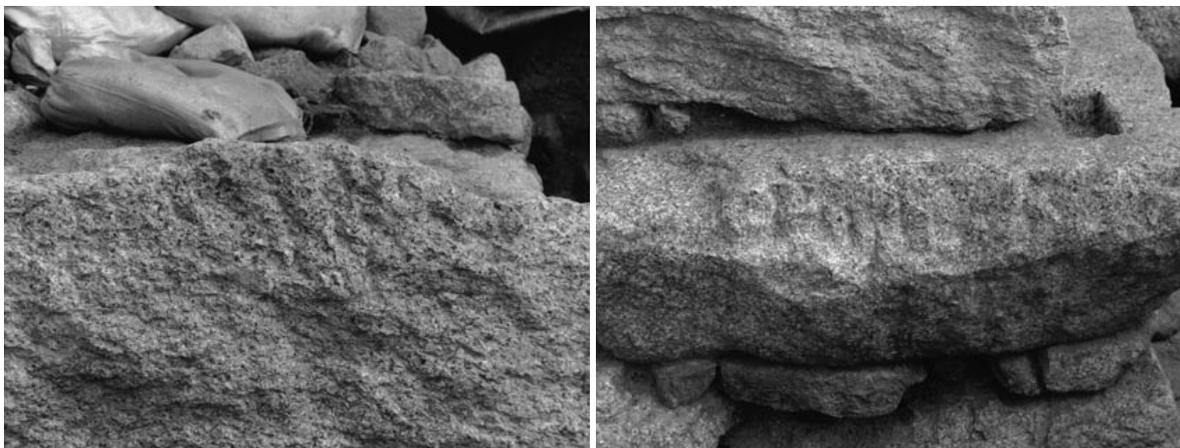


図20 石垣7角石西辺の加工痕（左）と溝8角石西辺の加工痕（右）

痕が見られた。石垣7角石の加工痕は、石の上端から約15cm、横幅約35cmの範囲に、幅約1.0cmの縦方向の条線10数本が確認できた。溝8の角石の加工痕は、石の上端から約15cm、横幅約45cmの範囲に、幅約1.0～1.5cmの縦方向の条線10数本が確認できた。いずれも、石の上端近くの範囲に限られ、縦方向の加工であることから、石垣と溝とを構築した後、石材の縁辺を整える目的で施された加工と判断する。

石垣7・溝8石材の矢穴痕（図21～23） 石垣7と溝8に用いられている石材の中には、石材を割る際の作業痕跡である矢穴痕を残すものが4石ある。いずれも、矢割りが成し遂げられているため、矢穴は半裁された状態で各石材に残されている。割石1は溝8の北面石組にあり、矢穴痕2個を残す。割石2は石垣7の角石で、石材の南面に矢穴痕5個を残す。割石3は溝8の東面石組にあり、矢穴痕5個を残す。割石4は石垣7北面石組にあり、矢穴痕4個を残す。割石1～3は矢穴立面を石組面に露出させるが、割石4は矢穴立面を溝8の天端に向けて積まれているため、石垣面に半裁された矢口が確認できるのみである。4石の割石はいずれも花崗閃緑岩である。以下、各矢穴の形状と矢口長辺と深さの実測値、および加工痕について記す。いずれも矢割りがなされているため、矢口の短辺の長さは不明である。各矢穴は帰属割石の番号に枝番号を付して表現し、枝番号は矢口を上にした状態で向かって左から1、2、3…とした。

矢穴1-1は左端が欠損する。底面は平らだが、右の立ち上がりが内湾する。矢口長辺の長さは

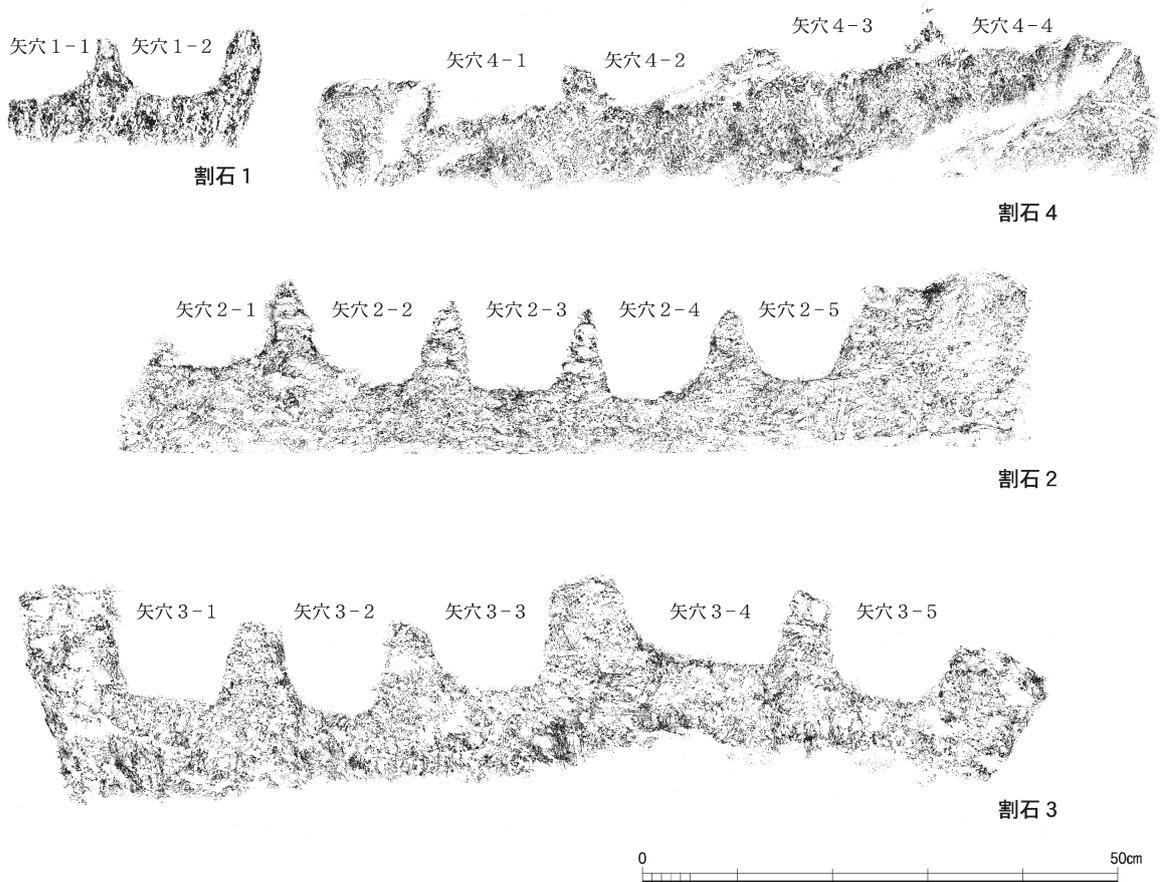


図21 矢穴痕拓影（1：8）

不明、深さ 6.3 cmある。矢穴 1 - 2 は底面が丸みを帯び、左右の立ち上がりが下半で内湾し、上半で外反する。矢口長辺の長さ 14.0 cm、深さ 7.1 cmある。矢穴 2 - 1 は左端を欠損する。底部は平らで、底面の角は隅丸となり、下半はほぼ垂直に立ち上がり上半で外傾する。側面に左上から右下方向の浅いノミ加工痕が数条残る。底面と側面の角部にはやや深いノミ加工痕が残る。矢口長辺の長さは不明、深さ 10.4 cmある。矢穴 2 - 2 は、底面は丸底状で左右の立ち上がりは、ほぼ直線的に外傾する。矢口長辺の長さ 16.4 cm、深さ 11.1 cmある。矢穴 2 - 3 は、底部は平らで、底面の右の角は隅丸形、左の角は明確な角をとり、立ち上がりはほぼ直線的に外傾する。矢口長辺の長さ 13.7 cm、深さ 9.1 cmある。側面に縦方向の浅いノミ加工痕が残る。長辺と短辺の角部と底面と側面の角部に深いノミ加工痕が残る。矢穴 2 - 4 は、底面は平らで、右の立ち上がりは下半で内湾し、上半で外反する。左の立ち上がりは隅丸の角部を介して、直線的に外傾する。側面に縦方向の浅いノミ加工痕が残る。長辺と短辺の角部と底面と側面の角部に深いノミ加工痕が残る。矢口の長辺の長さ 14.2 cm、深さ 9.9 cmある。矢穴 2 - 5 は、底部は少し丸みを帯びた平らで、左右の立ち上がりとも、隅丸の角部を介して直線的に外傾する。矢口長辺の長さ 14.5 cm、深さ 9.0 cmある。側面に縦方向の浅いノミ加工痕が残る。長辺と短辺の角部に深いノミ加工痕が残る。矢穴 3 - 1 は、底部は平らで、左右の立ち上がりはしっかりした角を介して直線的に外傾する。矢口長辺の長さ 14.1 cm、深さ 10.4 cmある。右の長辺と短辺の角部にやや深いノミ加工痕が残る。矢穴 3 - 2 は、底部は平らで、右の立ち上がりは隅丸の角部を介して、直線的に外傾する。矢口長辺の左の立ち上がりは下半で内湾気味、上半は直線的に外傾する。長さ 12.0 cm、深さ 9.7 cmある。右

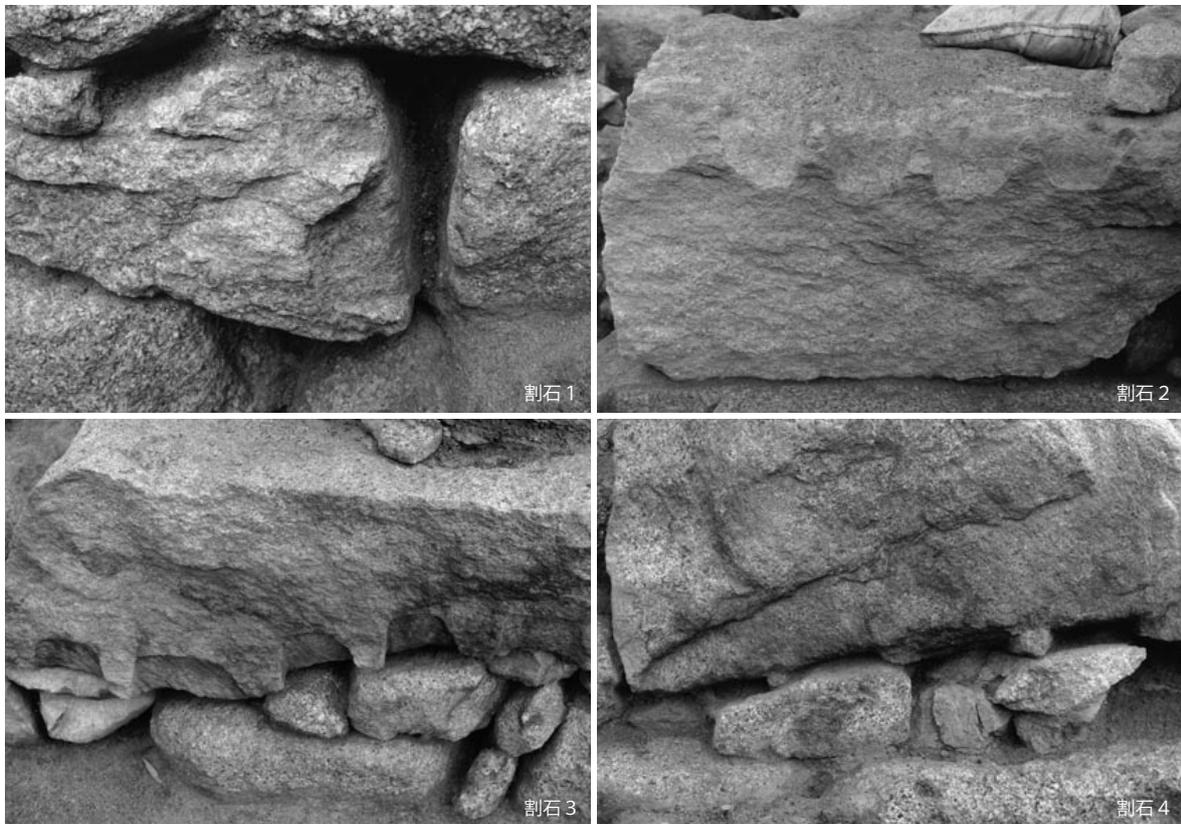


図 22 割石 1～4

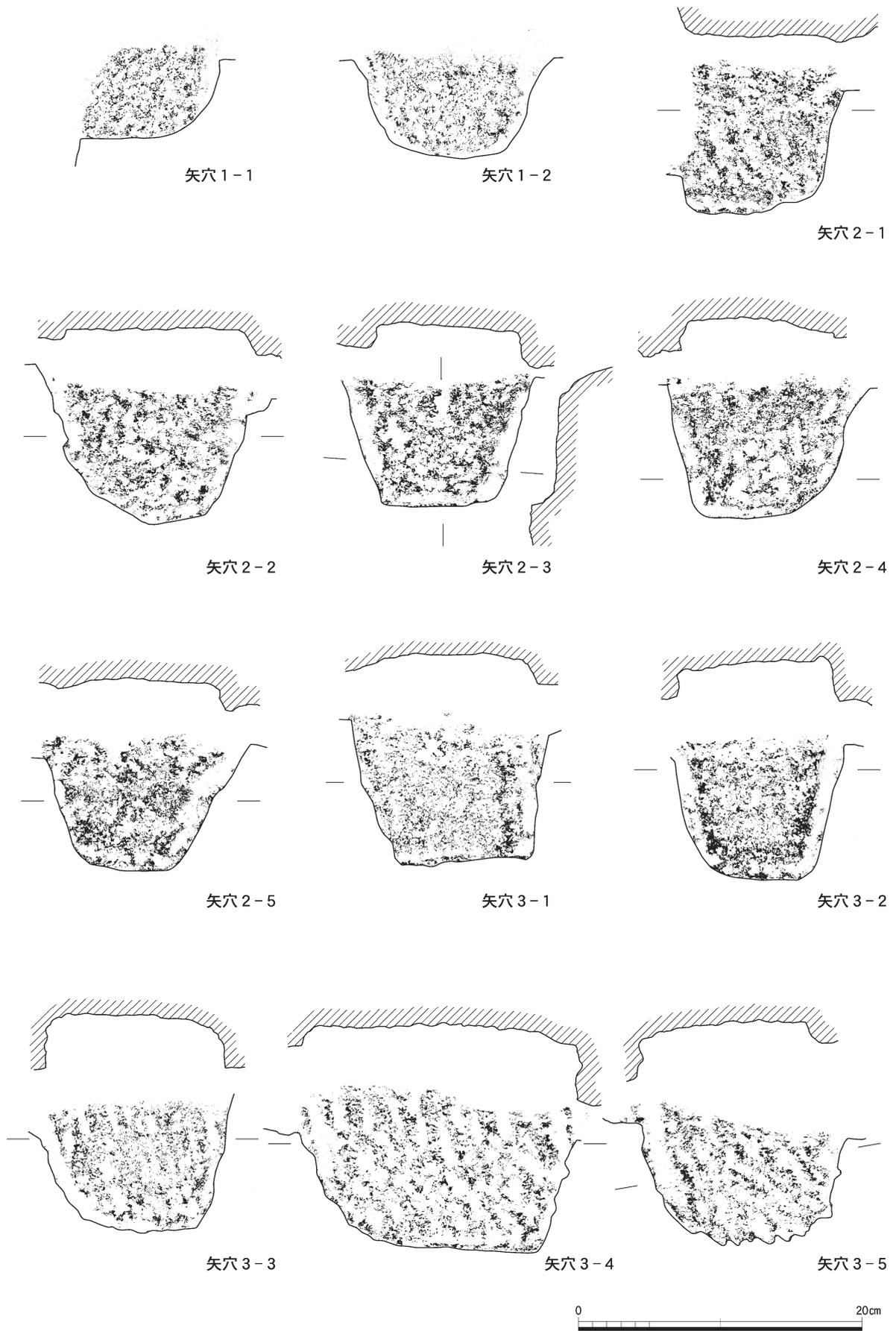


图 23 矢穴拓影·实测图 (1 : 4)

の長辺と短辺の角部に深いノミ加工痕が残る。矢穴3-3は、底部はやや丸みを帯びた平らで、右の立ち上がりはしっかりとした角を介してほぼ直線的に外傾する。左の立ち上がりは内湾しつつ外傾する。矢口長辺の長さ14.0 cm、深さ10.3 cmある。側面には左上から右下方向のノミ加工痕が顕著に残る。長辺と短辺の角部と底面と側面の角部にやや深いノミ加工痕が残る。矢穴3-4は、底部は平らで、右の立ち上がりはしっかりとした角部を介して直線的に外傾する。左の立ち上がりは、内湾しつつ外傾する。矢口長辺の長さ19.1 cm、深さ10.9 cmある。側面には左上から右下方向のノミ加工痕が顕著に残る。矢穴3-5は、底部は丸底状で、左右の立ち上がりは内湾する。矢口長辺の長さ14.7 cm、深さ9.4 cmある。側面には左上から右下方向のノミ加工痕が顕著に残る。底面と側面の角部に深いノミ加工痕が残る。割石4の矢穴については、立面形と深さが不明である。矢穴4-1は長辺と短辺の角をしっかりと取った長方形を呈する。矢口長辺の長さは14.1 cmある。矢穴4-2は長辺と短辺の角をしっかりと取った長方形を呈する。矢口長辺の長さは15.4 cmある。矢穴4-3は長辺と短辺の角をしっかりと取った長方形を呈する。矢口長辺の長さは14.2 cmある。矢穴4-4は平面形が不明瞭で、矢口長辺の長さも北端が計測不能のため、不明である。

立面形の不明な割石4の矢穴をのぞくと、これらの矢穴の平面形は、いずれも概ね逆台形を呈し、矢口から垂直に彫り下げるものはない。底面は平らなものや丸底状を呈するものがあり、左右の立ち上がりも直線的なものや内湾するものが混在する。左右で非対称な形状を呈するものも多い。また、矢穴3-4のように、極端に大きいものが存在し、ひとつの割石の中でも矢穴の大きさが一定しない。形式的にも大きさの面でも、個々の矢穴でバラツキが多いといえよう。矢穴側面のノミ加工痕は幅0.5～1.0 cmの縦方向の条線で、肉眼では判別しにくいほど浅いが、長辺と短辺の角のノミ加工痕は深さ0.3～0.7 cmある深いものであり、角付けの意識が明瞭である。半裁された平面形と矢穴横断面から復元すると、矢口平面は概ね隅丸矩形を呈することになる。中世の石造物に見られるような矢口平面が小判形を呈し、船底状となる矢穴はない。

矢穴相互の間隔についても記しておく。矢穴1-1～1-2の間隔は1.2 cmある。矢穴2-1～2-2の間隔は2.2 cmある。矢穴2-2～2-3の間隔は1.9 cmある。矢穴2-3～2-4の間隔は1.5 cmある。矢穴2-4～2-5の間隔は2.0 cmである。矢穴3-1～3-2の間隔は4.3 cmある。矢穴3-2～3-3の間隔は3.7 cmある。矢穴3-3～3-4の間隔は6.7 cmある。矢穴3-4～3-5の間隔は4.0 cmある。矢穴4-1～4-2の間隔は3.5 cmある。矢穴4-2～4-3の間隔は4.1 cmである。矢穴4-3～4-4の間隔は3.9 cmである。

割石2では矢穴間隔の平均値は1.9 cmであるのに対し、割石3では平均値は4.7 cm、割石4では3.8 cmである。矢穴間隔からみた割石の個体差も大きい。

落ち42 2区南東隅部分で検出した緩やかに下る地形である。北側の肩は東西方向に延び、溝8と並行するため、人為的に加工された地形と判断できる。斜面には拳大の礫が落ち込む。埋土は第6I層と第6J層である。遺構の性格については、「5. まとめ」で言及する。

石組45 南壁わきの断割で検出した石組である。長軸の長さ0.2～0.5 mの礫を東西幅約1.0 mの範囲に平らに敷いた遺構である。この遺構は平成5年度調査で検出した「池」の東護岸とさ

れるものであるが、この石組の東側に池状の堆積は確認できない。平成5年度調査の成果を参照すると、石組はほぼ座標の南北方向に延びるように見えるが、今回調査では、石組みが延びる方向は確認できなかった。遺構の性格については、「5. まとめ」で言及する。

(2) 3区の遺構

1) 基本層序と遺構検出面 (図24)

現地表下10～15cmの現代盛土層下に第1層があり、第1層下に第6層が厚く堆積する。第6層は第6H～第6J層からなり、全体の厚さは約60cmある。第6J層に整合的に覆われた状態で第8層があり、第8層下が第9層となる。調査はまず第6層上面で行い、次いで調査区の東壁と南壁わきを第8層上面まで断割った。その結果、3区北端の第8層上面で礫の集中部を検出したため、この付近を部分的に掘り下げ、第8層上面を調査した。また、断割調査で第8層上面が良好に残存していたことを受け、1区で検出した堤30の西への延長部分を確認するため、南拡張区を設けて調査した。南拡張区では第6層上面では遺構が残存しなかったため、そのまま第8層上面を調査した。これと関連して、西拡張区でも第8層上面を調査した。

2) 第6層上面の遺構 (図版5、図25)

江戸時代前半期以降の遺構面である。柱穴15～23・26・27は江戸時代後半期から近代以降の遺構、土坑14と溝25は江戸時代前期頃の遺構と考える。

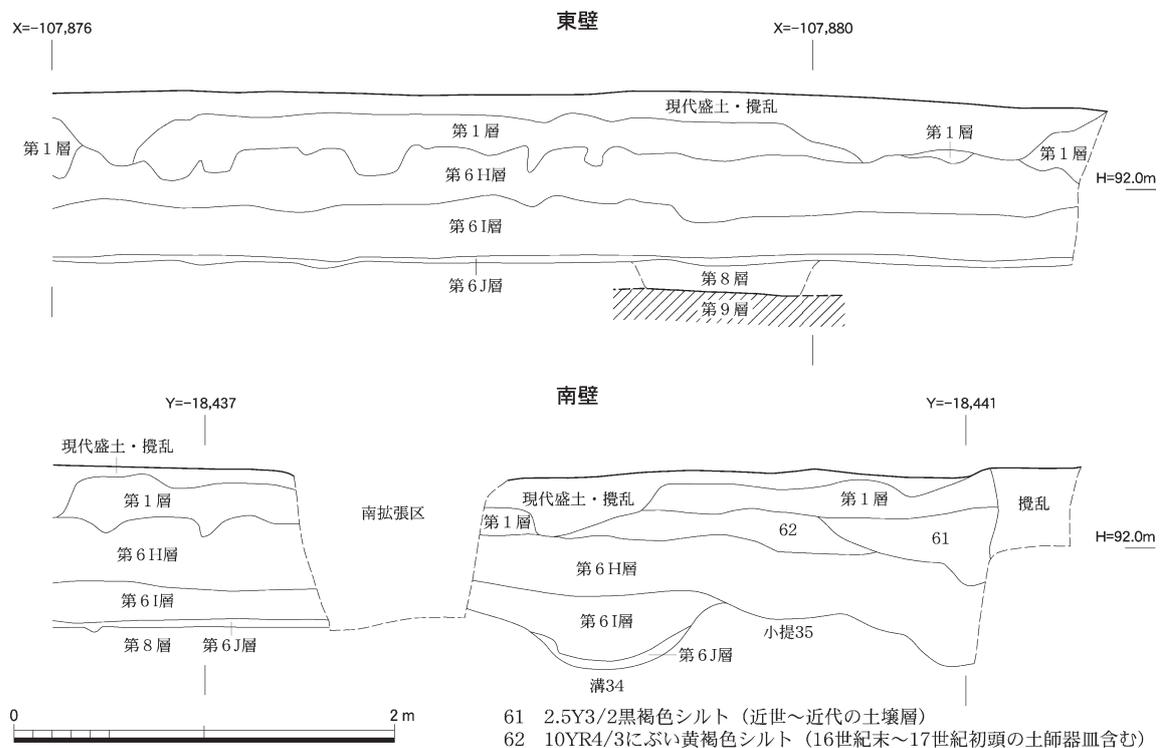


図24 3区東壁・南壁断面図 (1:40)

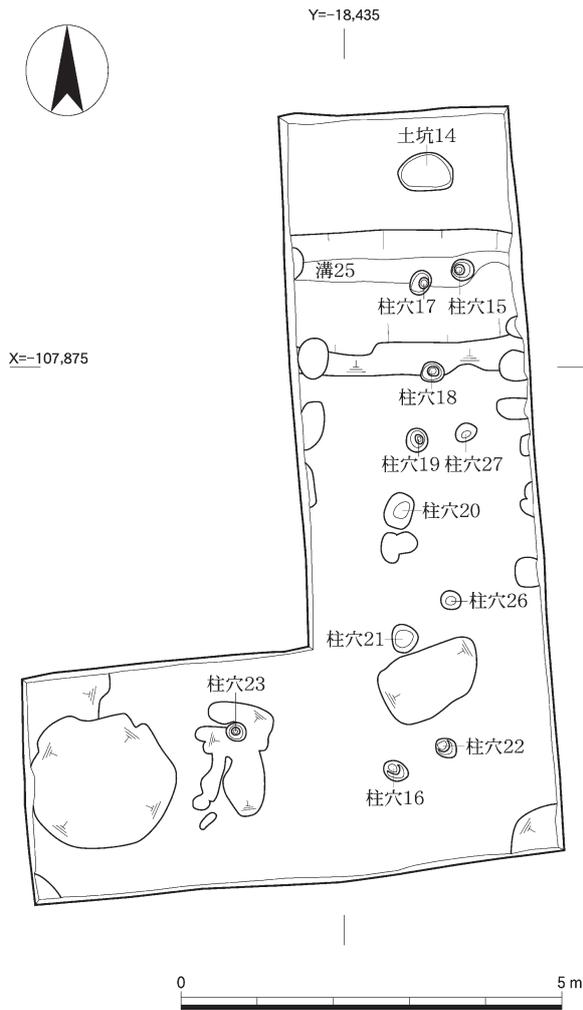


図25 3区第6層上面遺構平面図（1：100）

と判断する。

溝25 幅1.5～1.6mある東西方向の溝である。深さは約0.3mある。長さ約3.0m分を検出し、東と西は調査区外に延びる。溝の断面形はにぶく浅いV字形を呈する。埋土はオリーブ褐色(2.5YR4/3)シルトで、粗～極粗粒砂を多く含む。土壌化した第6層土が二次的に溝を埋めているようである。人為的に埋められたものかどうかは判断できなかった。溝底の高さは東が高く西が低いので、排水路の働きがあったものと考えられる。埋土から、京都XI期の土師器皿と17世紀初頭頃の陶器類の小片が出土している(図31)。以上により17世紀初頭頃の遺構と判断する。

3) 第8層上面の遺構(図版5・6、図26)

室町時代の遺構面である。北側の掘り下げ部分では、溝31と小堤36検出し、溝31の北側に台地斜面に連続する旧地形を検出した。南拡張区と西拡張区では、1区で検出した堤30と溝33およびそれに関連する遺構である溝34、小堤35を検出した。

溝31(図27・28) 3区北端から北拡張区にかけて検出した東西方向の溝である。幅約2.0m、

柱穴15～23・26・27 いずれも直径0.2～0.4mの平面形が円形の小柱穴で、柱穴中央に直径約0.12mの柱痕跡を残す。深さは0.2～0.3mある。埋土は灰黄色(10YR4/2)シルトである。柱穴17・18・19・20・21・16と柱穴15・17・27・26・22が、それぞれ南北方向の柱列となる。建物を構成するものではなく、柵のようなものであろう。埋土から16世紀から江戸時代にかけての遺物の小片が少量出土している。遺物から時期は確定できないが、埋土の状況から、江戸後半期を遡らない遺構群と判断する。

土坑14 3区の北端で検出した。東西約0.7m、南北約0.5m、深さは約0.1mある。埋土は黄褐色(2.5Y5/3)シルトに暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルトブロックと第6層の粗粒砂ブロックが混じるもので、人為的に一気に埋め戻された状況を示す。遺構の性格は不明である。埋土から京都X期の土師器皿に混じって、京都XI期新段階の遺物が出土している。以上により、17世紀後半頃の遺構

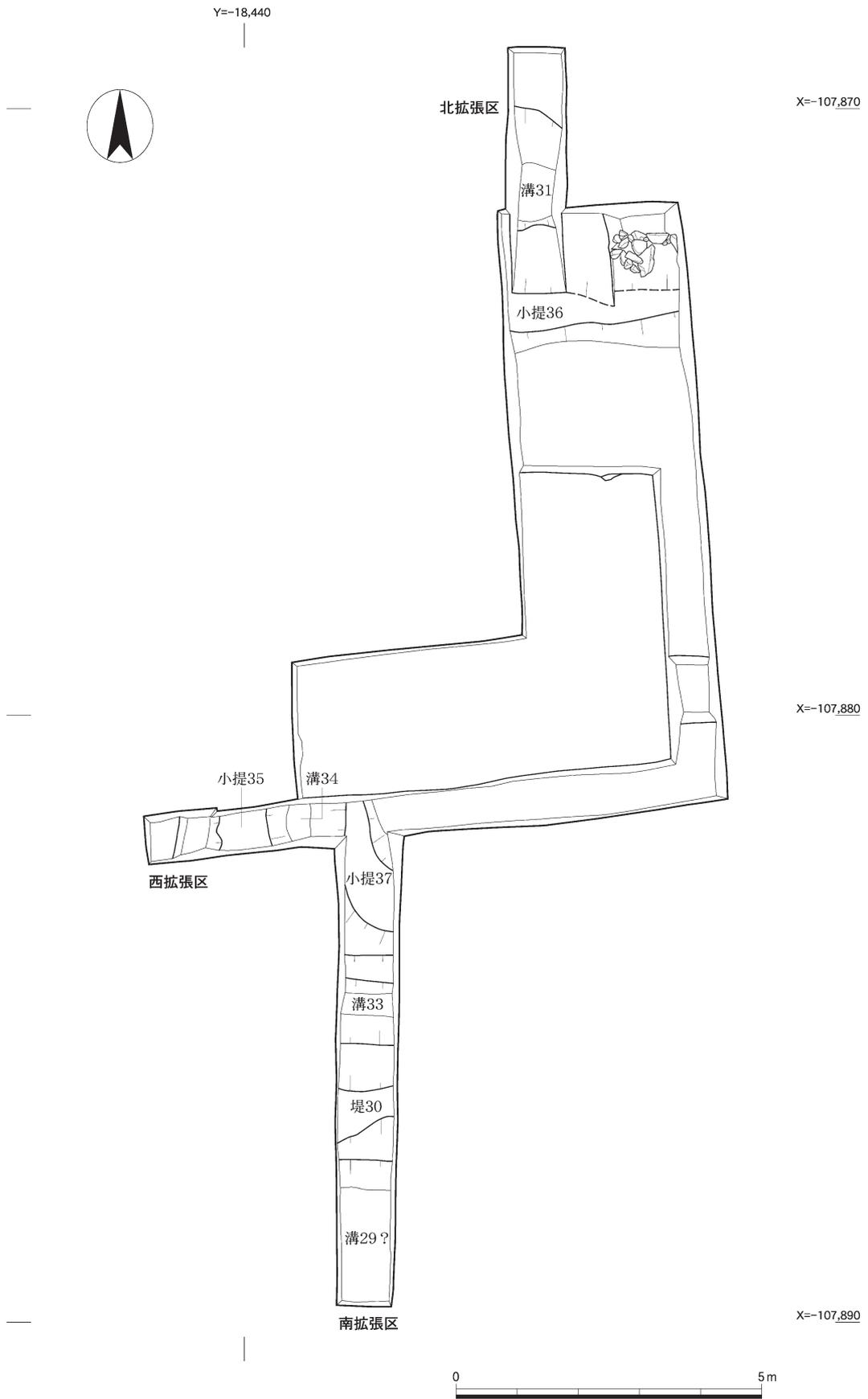
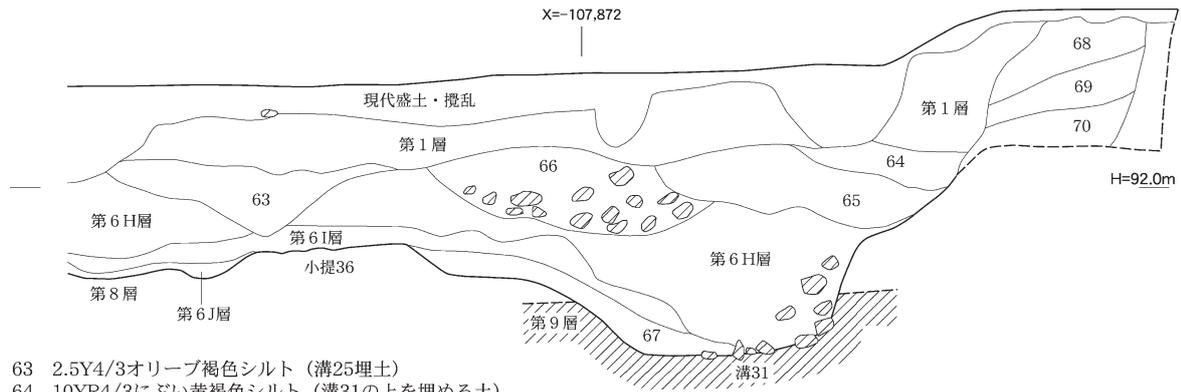


図 26 3区第8層上面遺構平面図 (1:100)



- 63 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト (溝25埋土)
- 64 10YR4/3にぶい黄褐色シルト (溝31の上を埋める土)
- 65 10YR4/4褐色シルト (溝31の上を埋める土)
- 66 10YR5/4にぶい黄褐色砂礫 (溝31の上を人為的に埋める土)
- 67 10YR4/2灰黄褐色砂礫 (流水性堆積)
- 68 10YR3/3暗褐色シルト (台地表層の土壌層)
- 69 10YR4/4褐色シルト (台地表層の土壌層)
- 70 10YR3/3暗褐色シルト (台地表層の土壌層)

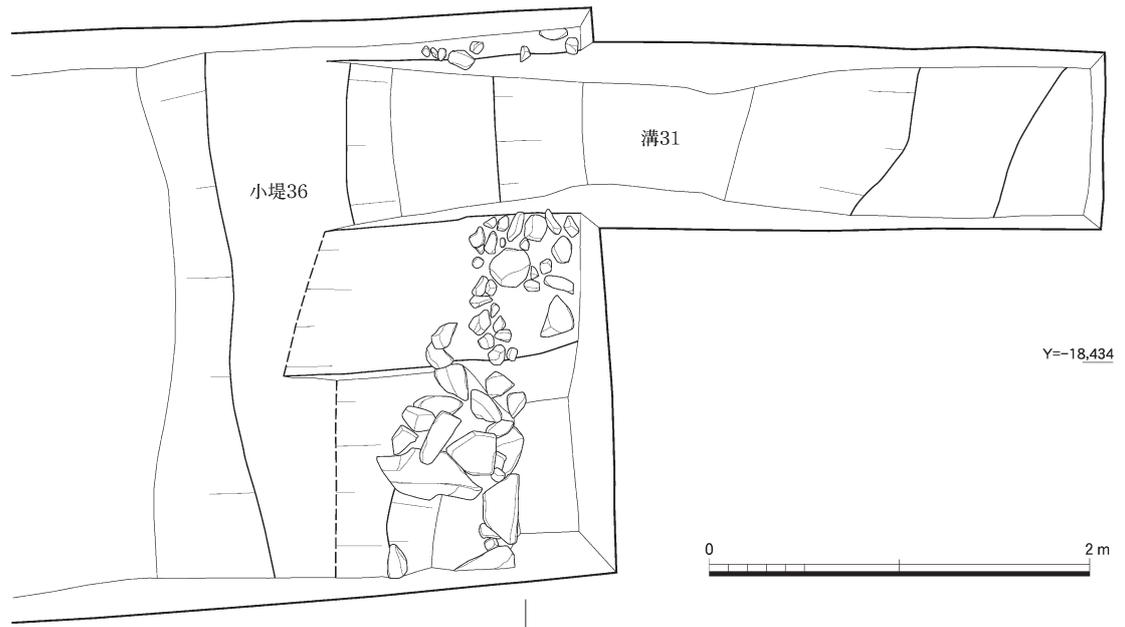
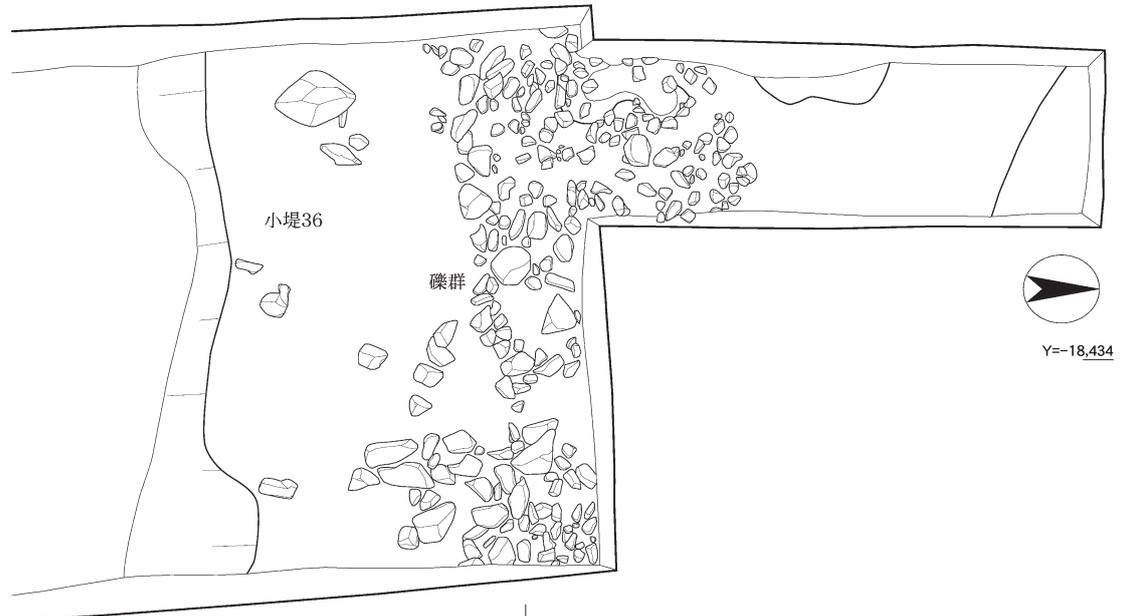


図 27 溝 31・小堤 36 実測図 (1 : 40)

深さは南肩部からは約 0.4 m、北肩部からは約 1.1 m あり、北肩はさらに旧地形の台地裾斜面に連続する。北肩は東西に約 0.8 m 分、南肩は東西約 3.0 m 分検出し、東西は調査区外に延びる。検出部の東半部では、最下層（層 67）が堆積した段階で南肩に石組の護岸を築いている。検出部分の西半では、この石組はない。埋土は層 67 の上から第 6I 層と第 6H 層によって埋没している。いずれも流水性の堆積で、洪水時の



図 28 溝 31・小堤 36 検出状況（南東から）

砂層で埋積したものである。埋土の上の窪みは層 64～66 が埋める。上位で検出した礫群は層 66 に帰属するもので、溝 31 上に残された窪みを埋めるため人為的に入れられたものである。また、層 66 で埋められる窪みは、断面で観察すると、溝 31 が埋まった後に掘り直された溝のように見える。しかし、これを平面的に検出することはできなかった。この溝状の窪みが遺構であるとするならば、第 6 層上面遺構となり、溝 25 に先行するものとなろう。第 6I 層と第 6H 層によって埋没することから、16 世紀後半に埋没した遺構である。埋土から X 期の土師器皿が出土している（図 35）。遺構の性格については、「5. まとめ」で言及する。

小堤 36（図 27・28）溝 31 の南肩口に平行して低い盛土を検出し、これを小堤 36 とした。頂部の幅 0.3～0.8 m、基底部の幅 1.3 m、高さ約 0.2 m あり。長さ約 3.0 m 分検出し、東と西は調査区外に延びる。北側の基底部と溝 31 の南肩との間には、幅約 0.5 m のテラス状のゆるい斜面がある。第 6J 層は南斜面を覆うが、小堤 36 を越えて北には堆積しない。上部を全体的に覆うのは第 6I 層である。盛土の状況は不明である。埋没状態から、溝 31 と同時に存在した一連の遺構で

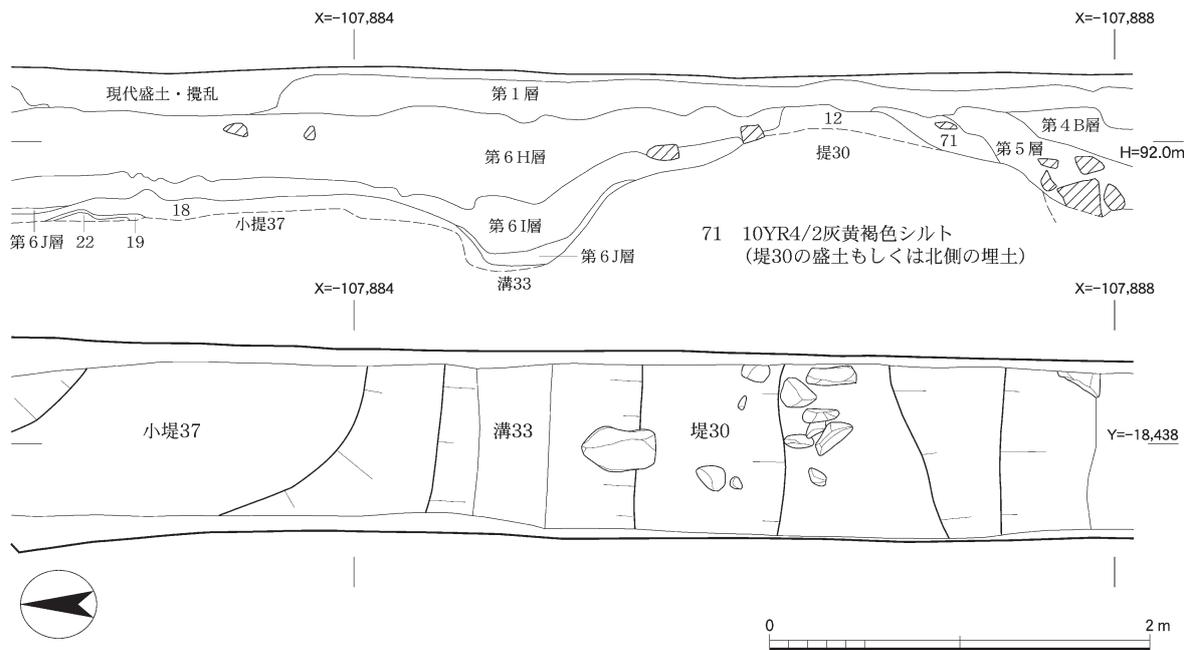


図 29 堤 30・溝 33・小堤 37 実測図（1：40）

ある。遺構の性格については、「5. まとめ」で言及する。

堤 30 (図 29) 1 区で検出した堤 30 の西への延長部分である。南側の斜面は第 5 層を除去した状態で掘り下げを止めたので、状況が不明である。頂部の幅 0.6 ~ 0.9 m、基底部の幅は不明である。高さは、第 6J 層下面から約 60 cm、溝 33 の底から約 90 cm である。長さ約 1.0 m 分検出し、東と西は調査区外に延びる。堤頂部付近に長軸の長さ 0.2 ~ 0.4 m の礫が集中する。盛土の状況は不明である。遺構の性格については、「5. まとめ」で言及する。

溝 33 (図 29) 1 区で検出した溝 33 の西への延長部分である。幅約 1.1 m、深さ約 0.5 m であるが、溝の南北肩部には堤 30 と小堤 37 があるので、どこまでを溝の幅および深さと見なすのか判断に苦しむ。長さ約 1.0 m 分検出し、東と西は調査区外に延びる。また、後述する溝 34 とは一連の溝となる可能性がある。埋土は最下部が第 6J 層、それより上は第 6I 層である。溝底の高さは、1 区検出部分より低いので、水流があったとすれば東から西に向かって流れていたことになる。遺構の性格については、「5. まとめ」で言及する。

小堤 37 (図 29) 溝 33 の北側にある低い盛土である。南拡張区東壁わきでは東西方向で溝 33 に平行するように見えるが、そこからほぼ直角に北方向に向き、3 区南壁わき断割の北壁にいたる。長さ約 2.0 m 分検出している。頂部の幅は東壁わきでは約 1.5 m、検出部北端では約 0.5 m である。高さは第 6J 層下面からは約 0.1 m、溝 33 の底から約 0.5 m である。北東斜面は第 6J 層で覆われ、上部は第 6I 層に覆われる。盛土の状況は不明である。遺構の性格については、「5. まとめ」で言及する。

溝 34 西拡張区で検出した南北方向の溝である。小堤 37 の南北方向部分に平行する。幅約 1.0 m、深さ約 0.25 m であるが、溝の東西肩部には小堤 37 と小堤 35 があるので、どこまでを溝の幅および深さと見なすのか判断に苦しむ。長さ約 0.6 m 分検出し、南北は調査区外に延びる。南北



図 30 小堤 35 検出状況 (北東から)

から東西に方向を変える小堤 37 に平行すると考えると、溝 34 と溝 33 は一連の溝となる。埋土は、最下部は第 6J 層、それより上は第 6I 層である。遺構の性格については、「5. まとめ」で言及する。

小堤 35 (図 30) 西拡張区で検出した南北方向の低い盛土である。溝 34 の西側の立ち上がりをもとに東斜面とし、頂部を介して西側の傾斜となる。頂部の幅は約 0.8 m、基底部の幅は約 1.3 m である。高さは溝 34 の深さとして既に記している。長さ約 0.5 m 分検出し、北側と南側は調査区外に延びる。東側斜面は第 6I 層と第 6J 層に覆われるが、両層はこの遺構を西側に越えていない。上部と西側斜面を覆うのは第 6H 層である。盛土の状況は不明である。遺構の性格については、「5. まとめ」で言及する。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、破片の総数で3,442点ある。種類別の内訳は、土師器2,018点(58.6%)、瓦722点(21.0%)、施釉陶器273点(7.9%)、国産磁器198点(5.8%)、焼締陶器163点(4.7%)、瓦器および瓦質土器39点(1.1%)、貿易陶磁10点(0.3%)、須恵器7点、緑釉陶器1点、灰釉陶器1点(以上3種で0.3%)、その他10点(0.3%)である。土師器は16世紀代のものが大半を占め、江戸時代のものがこれに次ぎ、平安時代のものが数片出土している。施釉陶器は全破片が16世紀末以降のものである。焼締陶器も大半が江戸時代のものが占める。瓦器および瓦質土器は室町時代後期から江戸時代前期の火鉢類が占め、瓦器碗はない。貿易陶磁は平安時代後期から室町時代後期にかけてのものがあるが、いずれも小片である。須恵器は中世の片口鉢の小片で、平安時代以前のものはない。緑釉陶器と灰釉陶器は1点ずつの出土であるが、いずれも平安時代中期以前のもので、従来いわれている浄土寺の創建以前にさかのぼる遺物として注意する必要がある。瓦類は、棧瓦を含む江戸時代のものが大半を占めるが、17世紀前半代と思われる軟質の瓦破片が一定量ある。室町時代の瓦は、瓦類全体の中で5%程度である。また、平安時代後期の瓦が1点のみ出土している。その他は江戸時代の鉄釘や火打石などで占められるが、第6～7層から建築部材もしくは調度の一部である金銅の座金具が出土している。16世紀代の地層から出土しているため、東山殿・慈照寺の施設に使用されていたものであることは疑いない。また、溝8から出土した加工石材は形状が五輪塔の火輪の部材に似るもので、未成品の可能性もあるものである。

表2 遺物概要表

| 時 代 | 内 容 | コンテナ 箱数 | Aランク点数 | Bランク 箱数 | Cランク 箱数 |
|-------------|---------------------------------------|------------|---|------------|------------|
| 平安時代 | 土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、 瓦類 | | 土師器1点、緑釉陶器1点、軒 平瓦1点 | | |
| 室町時代 後期 | 土師器、須恵器、瓦質土器、 焼締陶器、瓦類、飾金具、加 工石材 | | 土師器29点、軒丸瓦2点、軒平 瓦1点、飾金具1点、加工石材 1点 | | |
| 江戸時代 前半期 | 土師器、焼締陶器、施釉陶器、 国産磁器、金属製品、瓦類 | | 土師器3点、焼塩壺1点、施釉 陶器2点、国産磁器2点、軒丸 瓦3点 | | |
| 江戸時代 後半期 | 土師器、焼締陶器、施釉陶器、 国産磁器、瓦類 | | 国産磁器2点 | | |
| 時期不明 | 鉄釘、火打石 | | | | |
| 合 計 | | 31箱 | 50点(3箱) | 28箱 | 0箱 |

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より6箱多くなっている。

(2) 土器類

溝6出土土器類(図版7、図31) 1と2は溝6から出土した。1は肥前系磁器の青磁合子である。復元口径6.0cm、器高3.4cmある。内外面に青磁釉を施し、底部外面は無釉である。体部下半に片側が重なるように片切彫の蓮弁文様をめぐらす。釉は緑灰色(7.5GY6/1)、地は灰白色(2.5Y8/1)を呈し、底部外面は橙色(7.5YR7/6)である。製作年代はよくわからないが、17世紀後半以降のものであろう。2は肥前系磁器の染付椀である。復元口径10.0cm、残存高4.1cmある。口縁部内側直下に二条、体部と見込みの境界付近に一条の直線文を呉須で描く。外面は体部中央に植物文のみ描く。また、焼継の痕跡がある。18世紀後半から19世紀にかけてのものである。

溝11出土土器類(図版7、図31) 3～8は溝11から出土した。3・4は土師器の皿である。3は復元口径5.2cm、器高1.1cmある。見込みはナデ調整、他は指頭でおさえる。浅黄橙色(2.5Y7/3)を呈する。18世紀以降のものである。4は復元口径8.8cm、器高1.7cmある。見込み中央はナデ調整、内面と口縁部の外面はヨコナデ調整、体部と底部の外面は指頭でおさえる。にぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。京都XI期古段階のものであり、16世紀末から17世紀初頭頃のものである。5は土師質の焼塩壺蓋である。復元口径6.6cm、器高1.8cmある。天井部内面中央の器面調整は不明で、他の内面はヨコナデ調整する。口縁部から体部にかけての外面はヨコナデ調整、天井部は指頭でおさえる。にぶい黄橙色(10YR6/2)を呈する。17世紀前半から中頃のものである。6は瀬戸美濃系施釉陶器の折縁菊皿である。復元口径9.9cm、器高2.1cmある。見込み中央と底部外面および畳付は無釉、他の箇所には灰釉を施す。高台は削り出しである。釉はオリーブ黄色(5Y6/4)、地は灰白色(2.5Y8/2)を呈する。16世紀末から17世紀初頭頃のものである。7・8は肥前系磁器の染付椀である。7は復元口径10.1cm、残存高5.1cmある。体部外面に梅樹文を描く。17世紀後半のものである。8は復元口径10.0cm、残存高4.5cmある。体部外面に網目文を描く。17世紀後半のものである。

溝12出土土器類(図版7、図31) 9は溝12から出土した。瀬戸美濃系施釉陶器の天目椀である。復元口径11.5cm、残存高4.8cmある。残存部の内外面に天目釉を施す。釉は褐色(7.5Y4/4)から黒色(10YR1.7/1)を呈する。地は灰白色(10YR8/2)である。17世紀前半頃のものである。

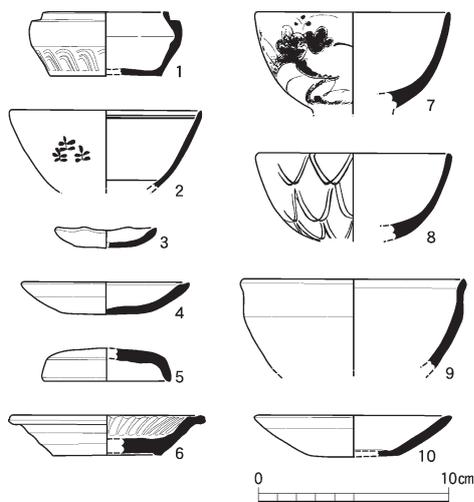


図31 溝6・11・12・25出土土器類実測図(1:4)

ある。復元口径11.5cm、残存高4.8cmある。残存部の内外面に天目釉を施す。釉は褐色(7.5Y4/4)から黒色(10YR1.7/1)を呈する。地は灰白色(10YR8/2)である。17世紀前半頃のものである。

溝25出土土器類(図版7、図31) 10は溝25から出土した。土師器の皿である。復元口径10.5cm、器高2.2cmある。見込み外周が浅くくぼむ。内面と口縁部外面はヨコナデ、体部と底部の外面は指頭でおさえる。浅黄色(7.5YR8/4)を呈する。京都XI期中段階から新段階に分類でき、17世紀中頃から後半のものである。

第6層出土土器類(図版7、図32) 15は第6G層、16と17は第6H層、11と20は第6J層から出土し

た。15は、帰属細分層は不明だが、第6層の上部の細分層に帰属すると思われる止水性のシルト層から出土した。これ以外は第6層から出土したことは確実で、帰属する細分層が不明のものである。11～19は土師器の皿である。11は復元口径9.6cm、残存高1.7cmある。内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。浅黄橙色(7.5YR8/4)を呈する。京都X期新段階に分類でき、16世紀後半のものである。12は復元口径9.1cm、器高1.6cmある。見込み中央はナデ調整、他の内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。にぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。京都X期中段階に分類でき、16世紀中頃のものである。13は復元口径9.2cm、器高1.8cmある。内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。浅黄色(7.5YR8/4)を呈する。京都X期中段階から新段階に分類でき、16世紀中頃から後半にかけてのものである。14は復元口径9.2cm、残存高1.9cmある。見込み中央はナデ調整、他の内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。京都X期中段階に分類でき、16世紀中頃のものである。15は復元口径12.6cm、残存高1.8cmある。内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。京都X期新段階からXI期古段階に分類でき、16世紀後半から17世紀のものである。16は復元口径11.4cm、残存高1.7cmある。内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。京都X期新段階からXI期古段階に分類でき、16世紀後半から17世紀初頭のものである。17は復元口径12.4cm、残存高1.8cmある。内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。にぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。京都X期新段階からXI期古段階に分類でき、16世紀後半から17世紀初頭のものである。18は復元口径12.3cm、残存高1.8cmある。内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。京都X期古段階に分類でき、16世紀前半のものである。19は復元口径12.8cm、残存高2.4cmある。内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。京都X期古段階に分類でき、16世紀前半のものである。20は土師器のツボツボである。口径2.5cm、残存高2.2cmある。内面はヨコナデ調整、外面はナデ調整である。灰白色(2.5Y8/2)を呈する。16世紀後半頃のものであろう。

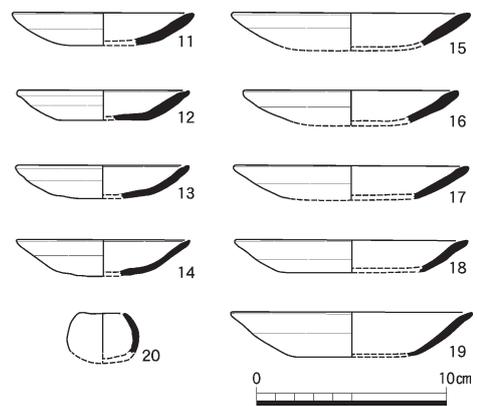


図32 第6層出土土器類実測図(1:4)

第7A層出土土器類(図版8、図33) 21～25は第7A層から出土した。すべて土師器の皿である。21は復元口径10.1cm、残存高2.1cmある。内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。京都X期中段階に分類でき、16世紀後半から17世紀初頭のものである。

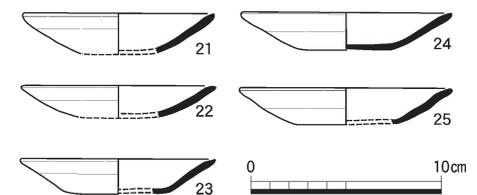


図33 第7A層出土土器類実測図(1:4)

類でき、16世紀中頃のものである。22は復元口径10.2cm、残存高1.7cmある。浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。京都X期中段階に分類でき、16世紀中頃のものである。23は復元口径10.3cm、器高18.5cmある。見込み中央はナデ、他の内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。にぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。京都X期中段階に分類でき、16世紀中頃のものである。24は復元口径11.2cm、器高2.0cmある。見込みはナデ調整、体部内面と口縁部外面はヨコナデ、体底部内面は指頭でおさえる。京都X期古段階に分類でき、16世紀前半のものである。25は復元口径11.2cm、器高1.9cmある。内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。京都X期中段階に分類でき、16世紀中頃のものである。

溝8出土土器類(図版8、図34) 既述のとおり、溝8上層は石垣7とその上部の土壌が崩落した地層である。26～30はこの上層から出土したものである。基本層序ではこの地層は第7B層に相当する。溝8の下層は流水性の砂層である。31～33はこの地層から出土したものである。26～33は土師器の皿である。26は復元口径8.1cm、残存高2.5cmある。内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。京都IX期新段階からX期古段階に分類でき、15世紀末から16世紀前半のものである。27は復元口径8.2cm、器高1.6cmある。内面はナデ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整、体底部は指頭によっておさえる。浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。京都X期中段階に分類でき、16世紀中頃のものである。28は復元口径9.7cm、残存高1.6cmある。見込み中央はナデ調整、他の内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。京都X期古段階に分類でき、16世紀前半のものである。29は復元口径12.3cm、残存高2.0cmある。内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。京都IX期新段階からX期古段階に分類でき、15世紀末から16世紀前半のものである。30は復元口径14.0cm、残存高2.0cmある。見込みはナデ調整、体部内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。京都X期中段階に分類でき、16世紀中頃のものである。31は復元口径13.9cm、残存高1.7cmある。内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。にぶい黄橙色(10YR7/2)を呈する。京都X期古段階に分類でき、16世紀前半の

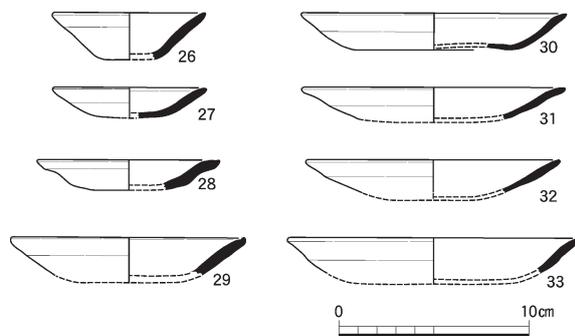


図34 溝8出土土器類実測図(1:4)

ものである。32は復元口径13.4cm、残存高1.8cmある。体部内面はナデ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面は指頭でおさえる。灰白色(2.5Y8/1)を呈する。京都X期古段階に分類でき、16世紀前半のものである。33は復元口径15.4cm、残存高1.9cmある。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面は指頭でおさえる。灰黄色(2.5Y7/2)を呈する。京都X期古段階に分類でき、16世紀前半のもので

ある。

溝 29 出土土器類 (図版 8、図 35) 34 と 35 は土師器の皿である。34 は溝 29 の埋土を覆う流水性の砂層から出土した。この地層は第 6 F 層に相当するものである。復元口径 14.4 cm、器高 2.2 cm である。体部内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面は指頭でおさえる。浅黄橙色

(10YR8/3) を呈する。京都 X 期新段階に分類でき、16 世紀後半のものである。35 は溝 29 の埋土から出土した。復元口径 8.6 cm、残存高 2.2 cm である。体部内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面は指頭でおさえる。浅黄橙色 (7.5YR8/3) を呈する。京都 X 期新段階に分類でき、16 世紀後半のものである。

溝 31 出土土器類 (図版 8、図 35) 36 ~ 38 は溝 31 から出土した。溝 31 は第 6 I 層と第 6 H 層によって埋没するため、36 ~ 38 は第 6 I 層と第 6 H 層中に帰属するものである。すべて土師器の皿である。36 は復元口径 9.4 cm、器高 1.7 cm である。見込み中央は調整不明、他の内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。灰白色 (2.5Y8/2) を呈する。京都 X 期中段階に分類でき、16 世紀中頃のものである。37 は復元口径 11.2 cm、残存高 2.1 cm である。内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。浅黄橙色 (10YR8/4) を呈する。京都 X 期古段階から中段階に分類でき、16 世紀前半から中頃のものである。38 は復元口径 11.3 cm、残存高 1.6 cm である。内面は器面調整不明、外面は口縁部がヨコナデ、体部は指頭でおさえる。京都 X 期中段階に分類でき、16 世紀中頃のものである。

土器 1 (図版 8、図 35) 39 は土器 1 で、1 区西部の堤 30 よりやや南の地点で出土したものである (図 8)。溝 29 の埋土の上部に帰属するものと思われるが明確ではない。完形である。口径 9.2 cm、器高 2.0 cm である。見込みはナデ調整、他の内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体底部外面は指頭でおさえる。京都 X 期古段階から中段階に分類でき、16 世紀前半から中頃のものである。

平安時代の土器類 (図版 8、図 36) 40 は 1 区の現代攪乱坑から出土した緑釉陶器である。復元底径 8.5 cm、残存高 1.5 cm である。高台の内側は無釉で、他は緑釉を施す。見込みの周囲に 1 条の沈線があり、他に陰刻の文様があるが、小破片のため判然としない。高台は削り出しである。釉は浅黄色 (5Y7/3)、地は灰白色 (2.5Y8/2) である。9 世紀末から 10 世紀初頭頃のものである。41 は溝 31 の埋土から出土した土師器の甕である。復元口径 19.8 cm、残存高 4.1 cm である。口縁部内外面はヨコナデ、体部は内外面ともナデ調整である。浅黄橙色 (7.5YR8/4) を呈する。9 世紀後半から 10 世紀前半のものである。これ以外に、平安時代の土器類として、京都 IV 期から V 期の土師器皿数片、口縁部が玉縁状を呈する白磁碗片などが出土しているが、実測できるものはない。

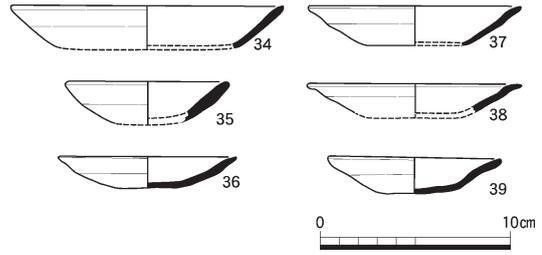


図 35 溝 29・31 出土土器類および土器 1 実測図 (1 : 4)

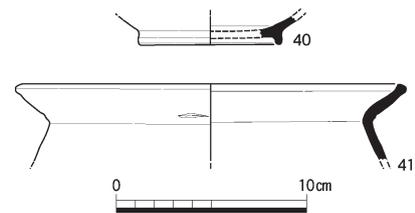


図 36 平安時代土器類実測図 (1 : 4)

(3) 瓦類 (図版9、図37)

江戸時代の瓦 42～44 は江戸時代の軒丸瓦である。また、43と44は同範である。42は溝5の掘形覆土から出土した。巴文の周囲に大きめの珠文がめぐり、周縁は約2.0cmと広い。瓦当の周囲はヨコナデ調整、裏面はケズリとナデを併用する。16世紀末から17世紀前半のものである。43は、石垣7付近で第6層の上位に乗る江戸時代の土壌層(図17の層54)から出土した。ほぼ完形である。全長約27cm、瓦当の直径は約14cmある。巴文の周囲に大きめの珠文がめぐり、周縁は約2.0cmと広い。丸瓦部には釘穴が残る。瓦当の周囲はヨコナデ調整、裏面はナデ調整する。丸瓦部外面は縦方向のケズリをナデ調整、側縁は縦方向のケズリ、内面は布目とコビキBを残す。16世紀末から17世紀前半のものである。44は1区の第4層から出土している。瓦当のみの破片である。43と同様である。

室町時代の瓦 45・46は軒丸瓦である。45は3区の第6層から出土した。外区と周縁のみ残る。周縁は2条の突線で区画され、内側に横長の珠文がある。瓦当裏面は指頭でおさえる。鎌倉時代以前の瓦の可能性もある。46は1区の第4層から出土した。外区と周縁のみ残る。外区には小振りの珠文がある。丸瓦部表面は縦方向のケズリをナデ消す。裏面は布目とコビキAが残る。須恵器質で硬い。47は軒平瓦であるが、反りが小さく大きさも小振りであるので、葺棟に用いられた小型の軒平瓦の可能性が高い。2区の第7層から出土した。周縁は狭く、外区はない。内区には唐草文がある。平瓦部凹面は布目をナデ消す。凸面は縦方向のナデ調整である。須恵器質で硬い。

平安時代の瓦 48は軒平瓦であるが、反りが小さく大きさも小振りであるので、葺棟に用いられた小型の軒平瓦の可能性が高い。1区の西壁わき断割で出土したが、明確な帰属層位は不明である。瓦当は剣頭文で、平瓦部に貼り付ける。平瓦部凹面に布目を残す。須恵器質で硬い。12世紀頃のものである。浄土寺に関連する施設に葺かれていた瓦であろう。

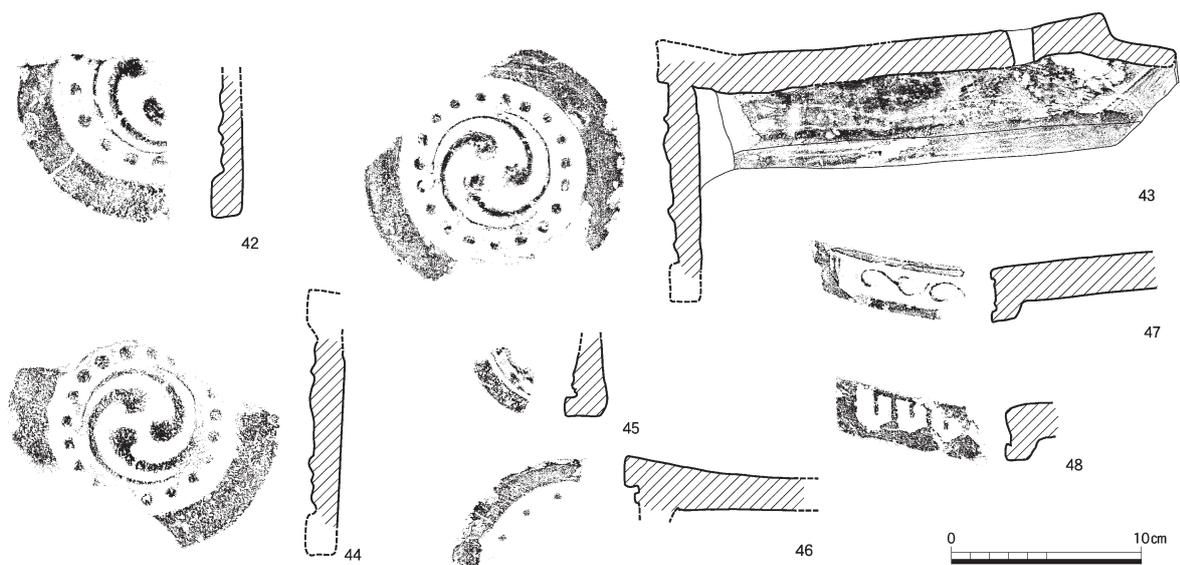


図37 瓦類拓影・実測図(1:4)

(4) その他の遺物

飾金具（図版9、図38）49は建築部材や調度などの引手の座金具と思われる。銅製鍛造で厚さ0.1 cm以下の薄い板を直径5.4 cmの円形皿状に加工する。金具全体の厚さは0.7 cmある。中央に長さ0.8 cm、幅0.4 cmの長方形の1孔を穿つ、この部分に引手が付くものと思われる。全体的に緑色の錆に覆われているが、一部の錆下に金箔を施した部分が観察できる。

加工石材（図版9）50は溝8の埋土上層から出土した加工石材である。石垣構成石材が倒壊したものである。黒雲母花崗岩で裁頭四角錐状を呈し、自然面を残さない。底面は一辺約45 cmのほぼ正方形の一隅を欠いたような形で、高さは約35 cmある。裁頭部は約16 cm四方の正形状が、打ち欠かれて歪んだ四角形を呈する。五輪塔の火輪の再加工品や火輪の未成品を再加工したものにも見える。

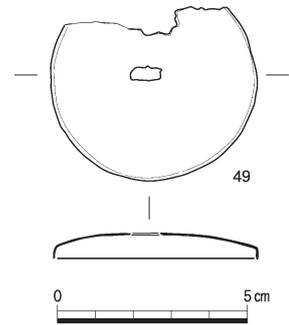


図38 飾金具実測図（1：2）

5. ま と め

(1) 遺跡の変遷 (図 39)

1) 東山殿以前 (平安時代)

東山殿以前の遺構は確認していないが、平安時代の遺物が少量出土している。平安時代後期の土師器皿片や軒瓦は、浄土寺に関連する遺物であろう。また、9世紀後半から10世紀前半にかけての土器片が数片出土していることから、浄土寺が記録に現れる10世紀後半から11世紀初頭以前のこの場所に、何らかの施設が存在したことが明らかである。

2) 東山殿・慈照寺期1 (室町時代後期)

石垣7の機能 2区で石垣7と溝8を確認した。この遺構は平成5年度の調査で検出された石垣および石組溝と一連の遺構となるものである¹³⁾。今回の調査成果と合わせて復元すると、この石垣と溝は、慈照寺の北側台地裾を正確に方位に軸を取って東西方向に延び、クランク状の曲がり方を2度繰り返して、南北に延びることが判明した。石垣の北と東は台地の急斜面であるから、この石垣は台地斜面の裾部の崩落をおさえるための擁壁であることが明らかである。慈照寺の敷地は、大文字川が作る扇状地の緩やかな斜面を人為的に開削し平坦地化していることは既に述べた。こういった開削が行われたのは15世紀後半の東山殿造営期と考えられるが、これによって扇状地の高位にあたる慈照寺平坦地の北端部は急峻な斜面となった。この扇状地を形成する地質はアルコーズ質の砂で崩落しやすいため、斜面裾部にこのような堅固な石垣擁壁を築いたものであろう。なお、石垣7の北側台地上には東山殿・慈照寺の主要建物である西指庵を想定する復元案がある。これを積極的に評価すれば、西指庵周辺の環境整備として石垣が施されていた可能性が指摘できる。3区北端で確認した旧地形の台地裾に石垣が施されていないことが、その根拠となろう。

溝8の機能 石垣7の基部には石組の溝8が構築されていた。石垣7と一連の石積み作業で構築され、深さ約1mある堅固なものである。この溝の働きは、埋土の堆積状況により水路であることは明らかである。今回の調査では、遺構の保存のため溝8を底面まで掘り切らず、一部で底面の深さを確認したのみに止まった。したがって、今回調査のみの情報では、水流の方向は明らかにできていない。そこで、今回調査の溝8底面の高さと同年度調査で検出したこの溝の底面の高さを比較すると、今回調査の溝8底面の標高は90.65m、平成5年度調査の溝底標高は90.45mで、今回調査の溝底のほうが約20cm高い。これにより、溝8の水流方向は、南北方向は北から南へ、東西方向は西から東であることが判明した。北から南への水流は地形条件に従った水流であるが、東西方向は西の低地から東の山地方向に水が流れていることになり、地形とは逆向きの水流が作り出されていることになる。水流方向から判断すれば、溝8を流れる水の源は慈照寺北側を流れる大文字川以外にあり得ない。ちなみに溝8検出地点より北西約75m地点(慈照寺現裏門ゲート付近)の大文字川底の現況の高さは、最も深い部分で約91.60mあり、溝8底面より高位にある。溝8検出部分のかなり西側からでも取水が可能である。次に、溝8を流れる水

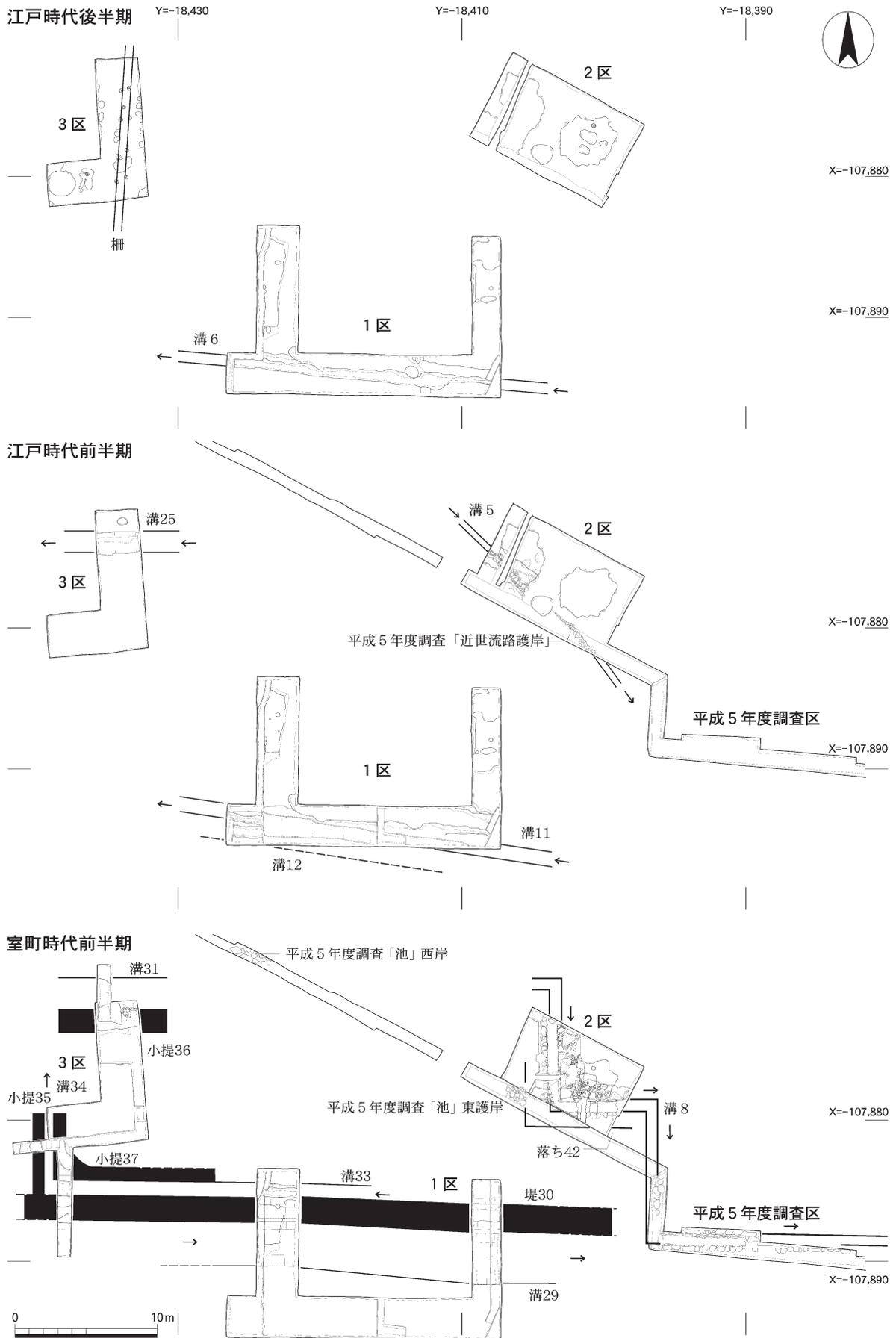


図39 遺構変遷図 (1 : 400)

の行き先であるが、こちらは慈照寺中心域の東の山際を南下して、園池にたどり着く以外にあり得ない。以上により、溝8の機能は、大文字川から東山殿・慈照寺の園池に導水するための水路であることが明らかである。慈照寺の園池は現在でも扇状地伏流水の湧出が見られるので、こうした湧水と溝8による導水とで東山殿・慈照寺の園池が維持されたのであろう。

堤30の機能 堤30は防御用土塁によく似た規模と形状だが、2度の改修を経て大型化した結果であり、1区西壁で観察できる当初の規模は極めて小さい。また、通常防御用土塁に付随する堀を持たない。後述する溝29は堤30に取り付く堀のように見えるが、溝29の掘削は16世紀後半と考えられ、当初のものではない。さらに、通常堀は、防御する区域を囲む土塁の外側に付設されるが、溝29は堤30の内側にある。以上により、堤30は防御用の堀ではない。堤30は、I期の段階から北側斜面に洪水砂のすりつきが見られること、改修のたびごとに規模を大きくしていること、最終的に数度にわたる洪水砂層である第6層で北側斜面が完全に埋没していること、堤30南側の慈照寺主要伽藍域に顕著な洪水砂を及ぼしていないこと、などから水防と砂防の機能を有した堤防であることが明らかである。また、第6I層に観察できた斜行層理により、洪水砂を運んだ水流は東から西に向かっていることが判明しており、洪水砂の給源は主として調査地北東の台地上であることが明らかである。既述のように、慈照寺の北側高所には大文字山と中尾山の間谷を抜けて大文字川が流れ出ている。山中の雨水は大文字川に集まり、慈照寺北側を通過して西の低地で白川に合流するが、激しい雨や土砂崩れによる河道の遮蔽などによる溢水は、慈照寺伽藍域に水害を及ぼしたであろう。また、大文字山以北の山地は風化しやすい花崗岩帯であるから、洪水時の激しい水流は、同時にアルコーズ質の砂を大量に供給したであろう。堤30は、こうした被害に備えて東山殿造営時に構築され、その後も洪水被害を経験しつつ改修され規模を大きくしていったものであろう。なお、西田直二郎は、調査地北東の山中に、大文字川付近から南に延び、慈照寺伽藍域に下る斜面の手前で東に折れる「土塁」が存在することを指摘している¹⁴⁾。こうした山中の「土塁」は、堤30と同様の機能を有する堤防であった可能性も指摘できよう。

溝33・34および小堤35～37の機能 堤30の北側に小規模な溝33が平行して取り付け、3区では溝33のさらに北側に小堤37がある。小堤37は1区では確認していない。小堤37は3区西端で北に直角に曲がる。3区西拡張区では、北に曲がった小堤37の西に溝34がある。溝33が小堤37に接して延びるとすれば、溝34は溝33と一連である。溝34の西側には小堤35がある。つまり、溝33・34の両側には堤30、小堤37、小堤35が常に取り付いている状態である。3区の北端では溝31の南側に小堤36が東西に延びる。これによって、3区中央部から1区の北側にかけてのエリアは、小堤36と小堤37に囲まれた平面長方形の池状の窪みとなる。この窪みの深さは約20cmできわめて浅いものである。しかし、この窪みの最も下層に堆積するのは止水性堆積の第6J層であり、この窪みが一時期浅く水を湛えていたことは疑いない。堤30の機能が水防や砂防にあることは既に明らかにした。これに関連させて解釈すれば、これらの小堤は洪水時に内側の窪みに砂を溜めつつ、水のみを溢れさせ溝33・34を通じて西北方向に流す仕組みになっていたと考える。堤を低いものにして故意に溢水させるのは、堤30への水力によるダメージを軽

減させ、水位を上昇させないための工夫であろう。また、これらの遺構は砂防の機能も果たしたものと考える。堤 30 が第 6 層の南側への流入を防いでいることは、すでに指摘した。また、第 6 I 層は小堤 35 によって西側への流出を堰き止められている。これらは、以上の小堤群が砂防の機能を果たしていたことの証拠となるものである。以上の水防・砂防遺構群は 16 世紀後半のものであるが、1 区西壁断面では溝 33 の北側肩口から北側に下がる斜面が見え、これが小堤 37 に先行する小堤の北斜面の可能性があるので、16 世紀中頃以前から引き続いていたことも考えられる。これらの小堤群と同じ第 6 I 層と第 6 J 層で埋没する 2 区の落ち 42 は、この砂溜りの肩と考えるのが妥当である。また、平成 5 年度調査の「池」は、埋土が今回調査の第 6 層と判断でき、ここでいう砂溜りの窪みの一部を構成するものの可能性がある。したがって、石組 45 はこの砂溜りの肩口となるものであろう。このような浅い砂溜りは、洪水後の浚渫が不可欠であるが、16 世紀後半にはこうしたメンテナンスが放棄され、第 6 層の厚い堆積が放置されたものとする。

溝 31 の機能 小堤 36 の北に平行する溝 31 は、平面的な位置関係と、台地裾に東西方向に掘られているなどの地形条件を勘案すると、溝 8 に連続する素掘り溝の可能性が指摘できる。溝 31 の溝底の高さは標高約 91.1 m で、既述の現大文字川底と溝 8 底の高さのほぼ中間にあたる。したがって、これを大文字川からの取水溝と考えると都合がよい。この溝が溝 8 に連続するとすれば、平成 5 年度調査で検出されているはずである。しかし、平成 5 年度調査は、調査深標高 91.9 m 程度に止まり、3 区での溝 31 検出高である 91.7 m に届いていない。ここに溝 31 の東への延長部分が存在していた可能性を考え、この遺構を溝 8 に連続する導水路と考える。

溝 29 の機能 溝 29 の溝底は西が高く、東に低い。埋土に流水性の堆積は顕著でないが、水路機能を想定すれば、溝 8 と同じく西から東への流水方向となる。溝 29 を東に延長すると、平成 5 年度調査の石組溝に当たり、これを一連の溝と考えることもできる。溝 29 西端の溝底の高さは標高約 91.0 m あり、平成 5 年度調査の石組溝の溝底の高さは約 90.45 m である。溝底の高さの比較からも、溝 29 と平成 5 年度調査の石組溝が西から東へと流れる一連の溝との想定が可能である。平成 5 年度調査の石組溝が今回調査の溝 8 と一連であることは明らかである。しかし、溝 8 が 16 世紀中頃に第 7 層によって埋没し、溝 29 が堤 30 のⅢ期以降に掘削され 16 世紀後半に機能していた溝であることに注意したい。また、平成 5 年度調査の石組溝は、溝埋土の上部に第 7 層の堆積が見られず、埋土の上部まで流水性の砂層で埋没している事実も重要である。これによって、平成 5 年度調査の石組溝は溝 8 と一連の石組溝ではあるが、溝 8 が埋没した 16 世紀中頃以降も機能していたことが考えられる。すなわち、溝 29 と平成 5 年度調査の石組溝が並存していた時期を想定できるのである。以上の事実を以下のように解釈することができる。東山殿造営時に作られた園池への導水路である石組溝は、16 世紀中頃に今回調査の 2 区付近で台地上表土の崩落土（第 7 層）により埋没した。これにより、溝 31 から石組溝を経由する導水路は機能しなくなった。そのため、新たに導水路が必要となり、洪水被害によって埋没する危険の少ない堤 30 の南側に溝 29 を作り、崩落土によって埋没しなかった平成 5 年度調査の石組溝部分に接合した。したがって、溝 29 は 16 世紀中頃から後半にかけて機能した石組溝と一連の導水路と考えたい。なお、平成 5

年度調査の立会C地点で確認された「池」の南岸は、この溝29の南肩であることが、平面的な位置関係と堆積状況により明らかである。

室町時代後半の景観 以上の考察により、室町時代後半の調査地付近は、台地斜面の擁壁、導水路、水防・砂防施設が存在した地域であり、東山殿・慈照寺の主要建物は存在しなかった。また、平成5年度調査で検出された「池」は、今回調査で検出した砂溜りの窪地と考えるのが妥当である。したがって、この「池」を園池と考える復元案は成り立たなくなった。なお、室町時代後半期の調査地付近には、座標の正南北方向に準拠した地割が存在したことが明らかとなった。

3) 慈照寺期2 (江戸時代前半期)

16世紀後半から17世紀前半にかけての第6層の堆積により、堤30以北の遺構は埋没し、その上に江戸時代の遺構群が検出される。堤の南では整地層である第5層が広い範囲に施される。この時代においても、慈照寺の園池や建物跡を検出しなかった。江戸時代前半期の調査地付近は、何の機能も有さない空地地であったと見なすことができる。2区の溝5は北西から南東方向の暗渠水路であるが、水流方向は室町時代後半の溝8とおおむね同様であるから、溝8、溝29、溝31などの機能を踏襲する導水路とも考えられる。しかし、溝5はきわめて小さい水路であることに加えて、施工も雑であり大量の水を流すことができるものではない。この溝の慈照寺境内における機能は今のところ不明である。なお、平成5年度調査で検出された石組みの「近世流路護岸」は、平面的な位置関係と石組みの規模・構造の酷似により、この溝5の延長部分であることは明らかである。3区の溝25は溝31の南側に検出されるものである。埋土に水成堆積は見られないが、溝底のレベル差から東から西に流れる水路の可能性はある。慈照寺敷地内の水を西に流す排水路と考えるのが妥当である。1区では南端に溝12が作られ、溝12の埋没・廃絶後に溝11が新たに作りなおされる。両溝とも排水路であるが、この南側に江戸時代の慈照寺の主要建物が展開するのであるから、慈照寺主要部と北側裏手の空地を分かち遺構であったと思われる。江戸時代前半期には、室町時代後期に見られた導水施設が衰え、排水施設が卓越する。また、室町時代後期に見られた座標北を主軸とする施設配置は崩れている。

4) 慈照寺期3 (江戸時代後半期以降)

溝11が埋没・廃絶後に、そのやや北側に溝6が新たに掘りなおされている。溝6は溝11・12の機能を踏襲するものである。2区では目だった遺構はなく、3区には小柱穴からなる南北方向の柵2列がある。この柵は北で東に約4°振る方位をもつ。これは溝6も同様であり、この時期の調査地付近の遺構の軸方向となっている。室町時代後期の座標北を主軸とする遺構配置は、江戸時代前半期の移行期を経て、江戸時代後半期に北で東に振る軸に変化したといえるであろう。なお、寛政2年(1790)の「銀閣寺境内図」は、この時期の景観を描いたものである。これによれば、慈照寺の主要伽藍の北側には「畑」とされた区域が広がり、そのさらに北側には「藪」とされた区域が広がる。この絵図に遺構図を重ねると、溝6は「畑」区域と「藪」区域の境界に位

置るようである。江戸時代後半期の調査地付近の大半は、雑木・雑草が生い茂るだけの場所であったと思われる。近代になるとこの地域全体に第1層が広がり、「藪」は開墾され耕作地となることがわかる。

(2) 石垣7・溝8の石工技術

石垣7・溝8に用いられた割石4石に矢穴痕を確認した。矢穴痕は、わが国では13世紀以降の石仏、石塔、板碑などの石造物に認められるが、顕著に現れるのは16世紀後半に成立する織豊系城郭以降の石垣用石材においてである。矢穴痕は平成5年度調査の石垣においても発見されているが、今回調査で発見した矢穴痕資料とともに、石垣の石材に用いられているものとしてはわが国で最も古い事例であり、石切技術の系譜を考える上で貴重である。矢穴については、すでに藤川祐作氏が分類を示され、年代についても考究されている¹⁵⁾。また、森岡秀人氏と坂田典彦氏は藤川氏分類と年代観についての最新の知見を示されている¹⁶⁾。これらを参照しつつ、今回調査の矢穴に一定の評価を与えておきたい。

藤川氏の分類によれば、矢穴はAタイプ、Bタイプ、Cタイプに大別できる。Aタイプはさらに古AタイプとAタイプに細分することができる。古AタイプとAタイプは深さに対して矢口長辺が広い点では同型式である。しかし、Aタイプは立面が整った矩形か逆台形状で、矢口平面は矩形を呈する。古Aタイプは浅い船底状か底部が丸底で、矢口平面は楕円形を呈する。古Aタイプは13世紀から16世紀にかけての石造物に見られ、17世紀以降のものにはない。Aタイプは元和～寛永期(1615～1644)の石垣石材に普遍的なものである。Cタイプは17世紀後半以降の矢穴、Bタイプは類例が少ないので触れない。

今回調査の矢穴は概ね立面逆台形状を呈するが、底部が緩い弧を描き、丸底状を呈するものが多い。また、矢穴底を平らに作るものでも立ち上がりの角は隅丸形のものが多い。立ち上がりは左右非対称なものが多い。これらの点は、本例が古Aタイプの特徴を有していることを示している。一方、矢穴2-3や矢穴3-1は矢穴底の両角が隅丸形にならず、明確な角を持っている。また、全体的に矢口平面は隅丸矩形を呈し、楕円形のものはない。これらの点は、Aタイプにつながる型式的特徴といえよう。総じていえるのは、個々の矢穴で形状と大きさのバラツキが大きく、定型化した矢穴型式を示さないことである。以上により、本例は型式的には古Aタイプに帰属させることができるものの、Aタイプにつながる特徴を随所に有しており、古AタイプからAタイプへの過渡期の型式的特徴を示していると結論できる。

本例は東山殿造営期の1480年代に構築された遺構に残されているものである。しかし、16世紀の石造物に残る古Aタイプの矢穴痕は、本例のようにAタイプにつながる属性を示さない。したがって、本例を16世紀後半以降に定型化する城郭系石垣石材の矢穴系譜につながる、現状では最古の事例として位置づけることができよう。ところで、石垣7はわが国の石垣遺構としては15世紀代にさかのぼる希少な事例として重要な遺構である。石垣7と一連の遺構となる平成5年度調査の石垣については、すでにいくつかの評価がなされており、その重要性も認識されている。

中井均氏は織豊期の城郭に出現する石垣の系譜をそれ以前の石垣遺構の中に求める作業のなかで平成5年度調査の石垣についても言及されている¹⁷⁾。中井氏は織豊期城郭に出現する石垣構築技術の系譜を、各地域の寺院等に用いられた多様な石垣構築技術のなかに求められている。慈照寺は将軍家の山荘として造営されたものであるが、高度な石工・石積み技術者集団を動員できたはずであり、織豊期城郭の石垣を準備した技術がここに見出されることは矛盾なく理解できる。中村博司氏は、『山科家礼記』長享二年正月二十九日条に東山殿の石垣構築工事に関連して「あなうのもの」「穴太」が見えることに着目し、東山殿の造営に近江の穴太に居住した石積み技術者集団が参加していたことを指摘し、平成5年度調査の石垣を「穴太」が積んだ最古の事例と評価されている¹⁸⁾。近世城郭の石垣構築技術の系譜をすべて「穴太」に帰す議論は、現在では批判されている¹⁹⁾。しかし、中村氏が示す事例は15世紀の後半には、近江穴太に居住する石垣構築技術者集団が存在したことを示している。今回の矢穴事例の矢割り技術系譜上への位置づけは、織豊城郭に出現する石垣構築技術を準備した存在としての「穴太」の存在について、再考を促す資料となるであろう。

なお、矢穴痕については藤川祐作氏と森岡秀人氏、石垣については北垣総一郎氏に、調査現場でご教示を頂いた。

註

- 1) 川上 貢「東山殿復元図」『金閣と銀閣 室町文化』週刊朝日百科日本の歴史 16、朝日新聞社、1986年。飛田範夫『庭園の中世史 足利義政と東山山荘』歴史ライブラリー 209、吉川弘文館、2006年、134頁。
- 2) 宮上茂隆「東山殿の建築とその配置」『日本史研究』399、1995年、2～27頁。
- 3) 「銀閣寺境内図」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』12、京都府、1931年、図版第7。
- 4) 川上 貢『日本中世建築の研究〔新訂〕』中央公論美術出版、2002年、429～431頁。
- 5) 西田直二郎「銀閣寺西指庵遺址」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』12、前掲、30～42頁。川上 貢「東山殿復元図」前掲、および飛田範夫『庭園の中世 足利義政と東山山荘』前掲。
- 6) 吉永義信『名勝調査報告』2、文部省、1935年、81頁。
- 7) 近藤知子「既往の調査」『史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-1、2003年、4～7頁。
- 8) 南 孝雄・百瀬正恒・清藤玲子「特別史跡特別名勝慈照寺庭園」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1996年、72～76頁。
- 9) 百瀬正恒「東山殿（慈照寺）の建物配置と庭園」『日本史研究』399、1995年、28～48頁。南 孝雄「慈照寺（銀閣寺）庭園」『発掘庭園資料』奈良国立文化財研究所、1998年、134～137頁。
- 10) 「アルコーズ」を花崗岩の風化崩壊物の意として用いる。以下も同様である。
- 11) 土師器皿の期と段階の区分は、小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀—』（京都編集工房、2005年）による。以下も同様である。
- 12) コビキの分類と年代観については、高槻市教育委員会『摂津高槻城 本丸跡発掘調査報告書』（高槻市教育委員会、1984年）139～142頁を参照した。
- 13) 南 孝雄・百瀬正恒・清藤玲子「特別史跡特別名勝慈照寺庭園」前掲。ただし、今回調査との比較に際しては、調査原図を参照した。

- 14) 西田直二郎「銀閣寺西指庵遺址」前掲。
- 15) 藤川祐作「千刈採石場－神戸水道千刈水源池中州の石英粗面変岩を産出する採石場－」『たからづか』13、1997年、89～101頁。なお、藤川氏の最新の矢穴分類と年代観については、同氏「年表－石工・石造遺物・矢穴－」（『川瀬の糞』5、1998年）を参照すべきであるようだが、筆者は未見である。
- 16) 森岡秀人・坂田典彦「矢穴・矢穴痕の多様性と機能的位置づけ」芦屋市教育委員会『徳川大坂城東六甲採石場Ⅳ 岩ヶ平石切丁場跡』芦屋市文化財調査報告第60集、2005年、136～161頁。
- 17) 中井 均「安土築城前夜－主として寺院からみた石垣の系譜－」『織豊城郭』3、1996年、35～54頁。
- 18) 中村博司「「穴太」論考－石積み技術者「穴太」の誕生と展開をめぐって－」『日本歴史』2006年2月号、18～34頁。
- 19) 松下 浩「穴太積の再検討－北垣聡一郎氏の議論によせて－」『織豊城郭』3、1996年、1～22頁。
木戸雅寿「近年石垣事情－考古学的石垣研究を目指して－」『織豊城郭』4、1997年、1～14頁。

版 图

報 告 書 抄 録

| ふりがな | しせき じしょうじ (ぎんかくじ) きゅうけいだい | | | | | | | |
|---|--|-------|--------|-------------------|--------------------|-------------------------------|-------------------|----------------------|
| 書名 | 史跡 慈照寺 (銀閣寺) 旧境内 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 2007-16 | | | | | | | |
| 編著者名 | 内田好昭 | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 所在地 | 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1 | | | | | | | |
| 発行所 | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2008年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| しせき じしょうじ 史跡 慈照寺 (ぎんかくじ) きゅうけいだい (銀閣寺) 旧境内 | きょうとしききょうく 京都市左京区 ぎんかくじちやう 銀閣寺町 | 26100 | A305 | 35度 01分 38秒 | 135度 47分 53秒 | 2007年11月 9日～2008 年1月29日 | 227m ² | 研修道場 ・休憩所 新築工事 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 史跡 慈照寺 (銀閣寺) 旧境内 | 史跡 | 平安時代 | なし | 土師器、緑釉陶器、瓦 | | | | |
| | | 室町時代 | 溝、石垣、堤 | 土師器 | | | | |
| | | 江戸時代 | 溝 | 土師器、施釉陶器、国産磁器 | | | | |
| | | | | | | | | |

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-16
史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内

発行日 2008年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961